
それでも世界は回ってる

白石レキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも世界は回ってる

【Zコード】

N6015C

【作者名】

白石レキ

【あらすじ】

剣と魔法と機械と人と・・・。一人の少年が旅の中で様々な国、町、村、人々と出会っていく話。時々残酷、時々ほのぼの。

エピローグ～冷たいカラダ～（前書き）

時間軸がバラバラです。
しかもいきなりエピローグ（前編）です。
ご理解ください

エピローグ「冷たいカラダ」

風が吹いてきた。

とても冷たい風で、顔や手など衣服から露出している部分にその冷えきつた空気が触ると、皮膚が凍えるような感覚と共に鈍痛を感じる。

「冷えてきたな・・・」

少年はそう呟いて開ききっていた上着のボタンを一つずつ閉じていく。その間にも風は少年の服の僅かな隙間から入り込み、少年の体温を少しづつ下げていく。

「ふう・・・」

溜息が白い蒸気になつて風に流されて、すぐに空氣の中に溶けていつた。

「もうすっかり冬だなあ・・・一体何度目だろう、旅に出てから冬を越すのは」

そう言つていると、とうとう雪まで降り出してきた。風も更に激しくなり、それは次第に吹雪になつっていく。

少年はすぐ近くに吹雪が止むまで過ごすには調度よさそうな洞穴を見つけたので、中に入つて焚き火を起こして暖を取った。

寒い中外に出て薪を集めて更にそれに道具も無しで火をつけるのはかなり時間がかかったが、そのままだと凍えてしまうので必死で木を擦つて火種を起こして、数十分の後にようやく焚き火が完成した。「はあ・・・アイツが居たら焚き火一つでこんなに手間取ることも無いんだけどな・・・」

火を起こすためにずっと木をグリグリ回していたために、真っ赤になってしまった両手を火に近づける。表面は暖かくなつたが、内部はまだ痛みと冷たさが残っている。

「一人つてのは、結構・・・辛いし、寂しいな

ポツリと少年が呟く。

「ああ・・・何で、こんなことになつたんだろう」

ぼーっと上を見上げながら少年がひとりごちた。

手のひらの内部にも熱が伝わってきた。表面が少し熱く感じてくる。

「俺・・・結局何のために旅をしてきたんだろう」

ひんやりとした洞穴の中で木がパチパチと燃える音と少年の声が響き渡る。

「目的のための手段として旅をしてきた・・・つもりだった。でも本当は・・・アイツや他の皆と一緒に旅をすることが・・・楽しくて、もう・・・それだけで」

洞窟内で木が燃える音だけが響き渡っていた。

「命懸けて戦つたり、財宝探して探検してみたり、困つてゐ人を助けてみたり・・・そんな日常が、楽しいものだと感じるようになつてしまつた。嫌な事だつてたくさんあつたけど、それも全部ひとつくるめて旅を楽しんでいる自分が居た・・・」

カツカツと足音が洞窟の入り口の方から聞こえた。ゆっくりだが近づいてきている。

「それもこれも、皆が居たから・・・」

脇腹の傷口から溢れ出てきて、すつかり冷え切つていた血が乾燥してそれ以上の出血を防いだ。

少し体を捻ろうとすると鋭い痛みが全身を走つて、少年の表情が歪む。

「ああ、ちょっと苦しくなつてきたな・・・目が霞むし、それに眠い・・・」

少し自嘲気味に少年は片手で腹部を押さえながら呟いた。

「でも、それももうすぐで解放される・・・もうすぐ」

足音が段々と大きくなつてきていている。

「せっかく逃げたのに、もう追いついてきたよ・・・やれやれ」

少年はよろめきながら立ち上がり、腰に差した剣を抜く。だが、立つていてるのも辛い様子で足元が覚束なかつた。

「だめだ・・・足がもう、言うこと聞かない」

フツと笑つたあと、少年はその場にドカッと座り込んだ。

「いいや、止めておこう・・・今の俺が何かしたところで・・・余計に苦しくなるだけだ」

段々と五感が鈍くなつてくる。田はもう殆ど見えなくなり、もう痛みと足音と焚き火の音しか感じ取れるものが無い。

「とりあえず・・・もう寝よう・・・疲れた」

少年はその場に蹲りゆっくりと田を閉じる。

風が吹いてきた。

冷たいが、どこか温もりを感じる変な風だつた。

その風が洞窟の中を満たし、少年を包み込む。

1・1 「道を歩く、僕らは」（前書き）

Hピローグとまた時間軸が大きくなっています

1・1 「道を歩く、僕らは」

無駄なことがもしけない

私のしていること、しようとしていること、思っていること
全てが意味の無いことかもしだれない

何をしたところで死んだ者は生き返ることはない
私の中の悲しみも苦しみも消えることは無いだらう

罪とは償つものではないのだ

償つことで許しを求めるものではないのだ

罪を受け入れ、罰を受けそれに報いて背負っていく

罪とは決して消えることの無い烙印なのだから

罰とは一時的なものではなく、その者の心に重く圧し掛かり
いつか潰してしまつものなのだから

許されようなどとは思つてはいけないのだ

償つてそれで終わりだとは思つてはいけないのだから

悪かったなどとは思つてはいけない

そういうふた想いは許されようと足搔く愚かな自己防衛本能だから
もしあの時“本当に”そう思つていたら

今の私は違つた私がいたのだろう

間違つたことだとは思つていらない

あの時も、そして今も、これからも

だがこの虚しさはなんだろう
この悲しさはなんだろう

結局私には正しい道など用意されていなかつたのかも知れない
どの道も私を幸せにはしてくれなかつただろう

だからせめて私は死ぬまでに作ろう

迷うことなく歩める道を

そうすることでも少しでも苦しみが和らぐのならば、忘れられるのなら
私はただただ道を作つていこう

シオンとリドルという二人の少年が居ました。

シオンは黒髪で年は十代半ば、体格は普通で精悍な顔付きの少年で
黒のジャケットに紺のジーンズをいつも着ています。

リドルは銀髪でシオンより年下で、体格は年齢の割に少し小さな少
年で白のフードつきのパーカーに黒いパンツをいつも着ています。

二人は平地を歩いていました。ところどころに雑草や花が生えて
て赤茶けた大地に模様を描いて、あとは何もありませんでした。
道がでこぼこしていたので歩いていると一人は段々と足が疲れて、
リドルが先に根をあげました。

「疲れた」

リドルがぼやきました。シオンは無視して歩き続けます。

「疲れたなあ」

リドルがひとりじりいました。シオンは無視して歩き続けます。

「・・・・・」

リドルは無言でその場にしゃがみ込みました。シオンは無視して歩き続けます。

「疲れたんだけどっ」

少し大きな声でリドルが喚きました。シオンは無視して歩き続けます

「・・・・・」

シオンは無視して歩き続けます。

リドルは観念して立ち上がりシオンの元へ走っていきます。

「もう一時間近く歩き続けるんだけど」

「一時間だ」

「足が棒のようなんだけど」

「気のせいだ」

「そろそろ休まない?」

「いや、もうちょっと頑張り。次の町まではまだ結構歩くと思つから、あんまりゆっくりしてると口が暮れてしまう」

一人はただひたすら歩き続けます。

リドルはまたぶつぶつと文句を言つていましたが、いつものことなのでシオンは無視しました。

更に一時間ほど歩き続けると、荒れたでじぼじ道が途中から誰かに整備されたかのようになだらかな地面の道に変わりました。

「変だな、地図にはこのあたりに町や村なんか無いはずなのに」

「でも歩きやすい、それはよいことだよシオン」

「そうか、ならあと一時間くらいは・・・」

「でもそろそろ休もうシオン、急ぐことも大事だけど適度な休息も必要だよ。『急いで事務を仕損じる』ところやつだよ」

リドルはシオンの言葉を途中で遮るよつにじて、もつともうじこじとを言つてその場に座り込みました。

最後の言葉に関しては意味が少し違いましたが、本人は「してやつたり」とこうような得意顔です。

シオンは「お前が言つと説得力がまるで無い」と言おうかと一瞬思いましたが、何だかもう色々と自分も疲れてしまったのでやつぱり止めました。

近くにあつた岩場に座るのに具合がよさそうな岩があつたので一人はそこに腰掛けました。

「結構遠くまで来たなあ」

「そうだね」

二人はまだ旅を始めてまだ間も無く、三日前に村を出たばかりです。

「まだ不安だよ、旅を続けられるかどうか・・・」

シオンは少し困つたように笑いました。

「でも、ここまで来れた。この先どこまで行けるか分からないけど、僕たちはここまで来れたんだよ」

リドルが少し嬉しそうな顔で言いました。

「そうだな」

シオンも顔を綻ばせました。

しばらく休んで二人はまた歩き出しました。道が平坦なのでとても歩きやすく、リドルが喜んでいました。

「でも何でこのあたりは道がこんなにキレイなんだろつね」

タンタンと地面を足で叩くように踏みながらリドルが言いました。

「ああ・・・誰か人が住んでるんじやないか?」

「ふーん、まあいいや」

リドルにとっては「歩きやすい道」であるだけで充分なことで、理由はどうでも良かったのでした。

更に歩いていくと、小屋が見えてきました。とても小さな木の板でできた粗末なもので、ちょっと人が住んでいるとは考えがたい小屋でした。

「あそこに住んでる人が道を整備したのかもね

「どうだらうな、行つて聞いてみるか？」

リドルは少し悩みましたが、結局気になつて仕方がなくなつたので行つてみることにしました。

「じめんぐださーい」

リドルがドアを叩きましたが小屋の中からは反応がありません。しばらく待つても中から物音が聞こえてくる様子はありませんでした。

「留守みたい」

「あるいはもう誰も住んでないのかもな

「うーん、じゃあ誰がこの道を・・・」

もう一度ドアを、今度はもっと力強く叩いてみましたがやはり反応がありませんでした。

「うー・・・」

もう一度だけ・・・とリドルはドアを叩こうとしましたが、やつぱりやめました。この道ができた理由と道を作った人のことが気になつて仕方がありませんでしたが、諦めて先に進むことにしました。

整備された道を更に歩き続けると、人が居るのが見えました。

近づいて見てみると、それは一人の男性でした。少し年をとつていて顔にはしわがいくつか見えました。

男性がこちらに気付いて手を振ってきました。リドルが元気よく手を振り返します。

そのあと男性は手にスコップを持つて何かの作業を始めました。遠くからだとよく分かりませんが、何かを掘つているようです。

「行つてみよう

リドルが男性のもとに走っていきました。シオンもそれを追いかけます。

1-1 「道を歩く、僕は」（後書き）

リドル「50メートル走では六秒台です、えへん」

シオン「俺は五秒台」

リドル「・・・・・」

1・2 「いれかりでわぬ町」（漫畫モード）

リドル「お茶と煎餅が好きです」
シオン「ラーメン、特に味噌」

1・2 「これからでれる町」

「こんにちは」

リドルが元気よく男性に挨拶しました。

「やあ、こんにちは。旅人さんかな?」

男性も笑顔でリドルに挨拶しました。

「はい、といつてもまだ駆け出しの身ですけどね」
追いついてきたシオンが代わりに答えました。

「この道はあなたが整備したんですか?」

シオンが聞いたら男性はまた嬉しそうな笑顔で答えます。

「ああ、私は・・・ここに町を作ろうと思つているんだ

「町を・・・ですか?」

男性は頷いてシオンたちに話しあいました。

自分も遠く離れた国からここまでやってきた旅人だったといつこと、
旅の目的は自分が住みやすい場所を探すためだつたということ。
そして今は旅を止めてここでたつた一人で町を作ろうとしているこ
とを、シオンとリドルに話しました。

「若いころはね、ここは俺の居るべきところじゃない、もつといい
所があるはずだ・・・つてあちこち旅して回ったんだけどね。どこの
国や町、村も私には合わない感じがしてね・・・。結局何所にも
移住しないでこいつしてここで町をつくろうなんて馬鹿げた事をやつ
てるわけさ」

「でもをおじさん、何でここに町を作ろうと思つたの。他にもつと
条件の良さそうな所とかいっぱいありそうな気がするんだけど・・・
。」

「こいつほら、まず道がひどいじゃん」

リドルがあるので「ほこ道を思い出して、「もつひざりだ」と言わ
んばかりに嫌そうな顔をしました。

「ははは・・・やうだね、私も何を思つてこんな所に町を作りうと思つたんだろうね」

男性は空を見上げながら少し考えました。

「うーん、 そうだな・・・こんなところだから作つてみようと思つたのかも知れないな」

「はあ、物好きだねえ・・・おじさんも」

「失礼だぞ、リドル」

「ははは、いやいいんだ。自分でもう思つから、うん」

「しかし町を作ると言つても・・・一人だと難しいんじゃないですか？」

シオンが聞きましたが、男性は笑っていました。

「そうだな、下手したら私が死ぬまで町なんてできないかもしねない。でもそれでもいいんだ、いつかここに町ができるば・・・それで」

男性は遠くをじっと見て、そう言いました。

男性が目を細めるとしわが寄つて、急に年老いたようにシオンには見えました。

「僕たちがここで旅を止める」とはできませんが、ただ

「・・・ただ？」

「いつかあなたが生きているうちに町ができる」とを願います」

「ありがとう、私が生きているうちに君たちが私の・・・いや、私たちの町に来てくれるることを願つよ」

「次の町に着いたらここのこと伝えるよ、できるだけ多くの人に」

リドルがそう言つと男性は、

「ああ・・・ありがとうございます。本当に君たちはいい子だな。こんな私にそんなに優しい言葉をかけてくれたのは初めてだよ、ありがとう・・・

・ありがとう」

目からポロポロと涙を流しました。

「ここからだとあと一時間もしないうちに町に着くはずだ、私の作った道が途中まであるからそれを頼りに行くといい。道が終わる頃にはもう町が遠くに見えてくるはずだから・・・ああ、あとこの先に最近野盗が出るらしいから気をつけ！」

「ありがとうございます、どうかお元気で！」

「何年かしたらまた来るよー」

「ははは、その頃には私はお爺さんだろうなあー、きっと」

そう言って男性は手を振つてシオンたちを見送りました。

リドルもシオンも振り返つてしばらく男性に手を振つたあと、また前を向いて歩き出しました。

「いい人だつたね」

「ああ、いい人だつた。とても」

もうあの男性も、あの小屋も見えなくなつた頃にリドルとシオンが言いました。

キレイな道を歩いていくと、遠くに町らしきものが見えてきました。あの男性に言われたとおりで、そこからは道がまたでございました。

「うう、またこれか・・・」

「・・・少し、休むか」

リドルが驚きました。

「珍しい、雨でも振るんじゃないだろ？か」

シオンが訝しげな顔をしてリドルを見ました。

「何だよ」

「いえいえ、お気遣い感謝します」

岩場に腰掛けて一人は少し遅めの昼食をとります。味氣ない保存食

と水ですが、無いよりマシなのでゅうべり味わうよつ元にして食べています。

「しかし、よく一人で町なんか作る気になつたよなあ・・・」

「すごいよね・・・僕には真似できないよ、とても」

最後の一 口を食べ終わつたリドルがそう言つて、水を一口飲みました。

「さて、じゃあ・・・そろそろ」

シオンが立ち上がりつて辺りを見回しました。大小様々な岩がそこら中に転がっています。

中には人ひとりが隠れられそうなほど大きなものもいくつあります。

「出てきてくれませんか？」

1-2 「これからでせる町」（後書き）

リドル「読書が趣味です」

シオン「料理、こいつが好き嫌い多いくせに味に五月蠅いかう」

リドル「こう見えても育ちがいいからね、ふふん」

シオン「なにお茶と煎餅が好物なのか」

リドル「だつてあれ美味しいもん」

シオン「さいで」

1・3 「彼らの作る町」（前書き）

リドル「商人ばかり集めると商人の町になつたり・・・」

シオン（・・・・・？）

リドル「神父さんやシスターばかり集めると大聖堂になつたりする
よね」

シオン「何の話だ」

1・3 「彼らの作る町」

「だいたい10人くらいですか、岩の陰に隠れているんでしょう？」シオンがそう言つと、本当に岩陰から人がぞろぞろと出てきました。だいたい10人くらいでした。

「いつから気付きましたか」

でてきた中の一人が聞きました。

「確信したのはあの人ガ“私たちの町に”と言つた辺りからですね。それまでは動物か何かだと思っていました」

「なるほど、ならば私たちがどういう存在なのかはわかりますか？」リーダー格の男性がシオンに聞きました。

リーダーの質問にシオンは正直に答えました。

「いいえ、でも興味はあります」

「うん、気になる。できれば聞いておきたいな」

リドルも正直に言いました。

「どうやら“彼”にも気付かれているようなので、お話しましょう。まず私たちは野盗ではありません・・・見た目がこんなですが」着ていたボロボロの衣服を手ではためかせて、リーダーが言いました。

他の仲間たちはそれぞれ適当な筋場に腰掛けました。
シオンとリドルも座りなおしました。

「私たちは彼のいた国からやつてきました、彼を見守るために」リーダーは少し間をおいたあと、話を続けます。

「彼は我々の国では英雄と言つていい程の存在でした。それだけ偉大な武人だったのです・・・」

「続きを、お願ひします」

「はい、彼は我々の國の王國軍に属していて・・・かつての我々の

部隊長でした。彼はとても強く、そして賢く……優しくあり、我々にとつては素晴らしい上官でした」

「しかし、ある日国内で内乱が起きました。首謀者は彼の幼馴染で同じ村で育った、彼の親友でした」

風が吹いてきました。砂埃を巻き上げ、一瞬だけ視界が悪くなりました。

そのとき、シオンにはリーダーの目から何かが零れたように見えました。

「彼は迷いましたが親友と、自分の育った村を焼き払いました。その時私たちは彼の判断は間違つてはいなかつたと思っています。でも、彼は悔やみ続けました。“自分は何のために今まで戦ってきたんだ”・・・と」

他の仲間たちも悲しい表情を浮べていました。何人かは涙を流しています。

「内乱の首謀者である彼の親友と村が壊滅したことで内乱は終わりましたが、彼は軍を辞めて国を出ました。“もうこの国にいる理由が無い”と、そう言つて」

「ならあなた達は、どうしてここに居るんですか？」

シオンが聞いたら、リーダーは笑顔で答えます。

「私たちも、その村で育ちましたから」

「・・・」

「続き、話してもいいですか？」

シオンとリドルは少し驚いた顔をして

「え・・・」

「あ、はい・・・どうぞ」

と、言いました。

「それから色々とあって、我々は彼を影から見守ることになりました。

彼は私たちを必要とはしていませんから余計な手出しあはしたくなかつたのです。でも、私たちには彼が必要だつた……だから我々も

「國を出ました。家族はこの部隊でしたから」

「彼は、気付いているんでしょうか？」

「はい、恐らく……でも気付いていないふりをしているのでしょうか。でもいいんです、これで」

風が冷たくなつてきました。もうすぐ日が暮れて夜になつてしまします。

「ああ、もう二んな時間ですね。こんな下らない話に時間をとらせて申し訳ない」

「いえ……お話を聞けて、とても良かつたです」

「これからもあのおじさんを見守つてくれる？」

リドルが聞きました。リーダーとその仲間は全員笑顔で頷きます。

「ええ、もし彼の邪魔をしようとするものがいたら……。そのために私たちがこうして野盗に扮してるわけですから」

「最後に、一つだけ……いいですか？」

シオンがリーダーに言いました。リーダーは「どうぞ」と頷きました。

「彼は、どうして軍に入つたんですか？」

シオンがそう言つたら、リーダーは声を上げて笑いました。

「ははは……あなたはとても賢い人ですね。彼から昔聞きました。

……“大切な人たちを守るために”だそうです。因みに彼の親友……女性です、彼がその女性の写真をいつも大事そうにしていました」「そうですか……」

「では、私たちはこれで。他の小隊と合流する時間ですので」

「僕たちもそろそろ行きます。……いつか、ここに町ができる頃に、また」

「ええ……また、会いましょう」

で「ほこして歩きにくい道を、シオンとリドルはひたすら歩き続けます。

「ちょ・・・待って、シオン」

「早くしないと夜になる、もたもたしてたら置いてくぞ」

シオンは数メートルほど後ろでダラダラ歩いているリドルを無視して先に進みます。

「別にここに野盗とかが出るわけじゃないんだから野宿でも・・・」

「俺はふかふかのベッドで休みたいんだ、何としても」

「じゃあ、シオン一人で行つてよ・・・僕は一人でのじゅ・・・ガサガサと何かがうごめく音がしました。」

「ひつ」

それを聞いてリドルは飛び上がって、すっかり離れてしまったシオンの方へ駆け出します。

「待つて、やつぱり僕もふかふかベッドがいいいいいいい」

冷たい風が吹いてきました。

砂埃が舞い上がって、視界を遮ります。

それでも構わず二人は歩き続け砂埃があさまり視界がよくなると、もうすぐ近くに町が見えてきました。

二人は歩き続けます。

つづく

1・3 「彼らの作る町」（後書き）

＜あとがきタイムズ＞

ようやく終了第一話（・・・）

次回は剣やら魔法やら色々なバトルが展開されます

2・1 「夢の国」（前書き）

バトルあり。死を比喩する表現あり。グロでは無いです

2・1 「夢の国」

醒めない夢、悪夢

終わらない悪夢、恐怖

永遠の恐怖、死

まどろんだ世界の中、私は夢を見る

理想の世界、理想の国、理想の民

夢の中では私はその世界の王となり、全てが私の意のままに

その私だけの世界も、少しづつ・・・

蝕まれ、侵食されていく

飲み込まれていく・・・

消える・・・私の世界が、私の国が・・・

溶けて消える・・・

「不思議な国だ」

シオンが言った。

「不思議な国だね」

リドルが言った。

不気味なほどに人が少なくて、不気味なほどに静かで、不気味なほどに風も無く生暖かい空気が体に纏わり付いてくる。とても、気持ちの悪い感じの国だった。

中に入つてしまはらくすると、薄気味悪い感覚も和らいででき、代わりに微かな眠気が二人の表情に表れはじめて、ゆっくりとまどろみの世界に足を踏み入れる。

二人は“夢の国”と呼ばれる場所に来ていた。
国といつても広さは少し大きな町といったところで、中心部に城があつてその周りを城下町が囲み、更にその周りを高い城壁が囲む。単純な構造だつた。

「にしても何で“夢の国”なのかね」
リドルがぼやいた。本人はこの国をとても豊かな楽園か何かと思い込んでいたらしい。

「門番の兵士が言つていたな、ここは国王の夢が作り出した国だ・・・つて」

「なんだそりや、随分と詩的だねえ」

「いや、もしかしたら本当かも知れないぞ。この国は国王の見ている夢が具現化したもの・・・だとか」

「まっさかー」

二人は最初は冗談だと思っていた。

しかし、城下町を歩いていくうちにこの国の異質な何かを感じ取つた。

道行く人の顔を見てみるのだが、どうも皆元気の無さそうな表情をしている。すれ違う人の全てが下を向いて暗い表情を浮べて、よろよろと歩いていく。

「ど、どうしたんだろ? ね、この国の人たちは

「皆揃つて嫌な夢でも見たとか

「まっさかー」

「・・・だよな、でも何かがおかしい。この国何かあるぞ・・・きつと

「ま・・・まつさかー」

シオンが真剣な表情になつたのを見て、リドルは不安になつてきした。

門番と話したときから何かが妙だつた。

城壁に囲まれた国の入り口で、たつた一つしかない城門を一人の兵士が見張つていた。

遠くから見ると城門が陽炎のように時々歪んで見えたのだが、田の前まで来てみると城門はしっかりとそこにあるのが見えた。

「ようじや」

門番がシオンたちを見ないで、どこを見ているのか分からぬ田をしながら言つた。

「ようじや」

もう一人の門番も口以外は微動だにせず、シオンたちに感情が全くこもつていはない声で入国を歓迎するかのような台詞を喋つた。

「この國は夢の國、王の夢が作り出すそこにあつて、そこに無い國」二人の門番が同時に、同じ声で、同じ喋り方で一人に言つた。言い終わると同時に大きな城門がまるで自らの意思を持つてゐるかのように、勝手に開いた。

「あの、これつて・・・入国許可といふことですか?」

シオンが門番に聞くが、門番は全く反応しない。

「・・・ま、いいか」

「うーん、変な國だなあ・・・。わっさから頭がぼんやりするし・・・」

「俺も、なんかだるい・・・・・わっさと宿とつて寝るか」

「さんせえーい・・・」

一人が門をぐぐつて中に入ると、城門がゆっくりと閉まり出した。

「う、あ・・・ああ・・・」

門が閉まつていぐ中、一人の門番が呻き声をあげながらその場に蹲

る。

「あ

門が完全に閉まりガタンという大きな音を立てた瞬間に、一人の門番が一瞬で溶けて消えた。

鎧や服はそのままで肉体だけがいきなり赤い液体に変わって、ボタボタと地面上に落ちる。

2・1 「夢の国」（後書き）

リドル「僕ね、いつか海賊王になるんだ」
シオン「そうか、まあ頑張れ」

2・2 「魔導師、導くもの」（前書き）

説明台詞Gの回
裏タイトルは「教えて！リドル先生」

2・2 「魔導師、導くもの」

陰鬱な空気の立ち込める中、シオンとリドルは宿を探して歩き回る目の前にふらふらと道を歩いている男性がいたのでシオンは話しかけてみた。

「すいませんがこの辺りに泊まれるとこには・・・」

「あ、ああ・・・まだ、眠い、眠い・・・寝たら、寝たら俺もきっと・・・」

「いや、だから泊まるところを・・・」

「だめだ、寝ちゃ駄目なんだ・・・寝たら・・・ああ・・・」

「・・・失礼します」

男性はまるで寝言でも言っているかのように、途切れ途切れでどもつた口調で喋った。

その後何人か当たつてみたが、誰も彼もが似たような答えを返してきた。

「つう、何なんだこの町は・・・会う人会う人に話を聞こえとしてもまともな答えがまるで帰つて氣やしない」

「何か事件か何かが起きたんじゃない?」

「まさか、国民全員が寝ぼけてるとか・・・は無いだろうなあ」「目をこすりながら眠気と闘いながらまともに話ができるそうな人を探す。」

しかし会う人は皆足元が覚束ない状態でふらふらと歩いている、本当に寝ぼけているような人ばかりだった。

そのうちの一人が突然歩くのを止めた。

「う・・・あ・・・来るな・・・」

その場に崩れ込んで呻き声をあげる。

それを見たシオンとリドルは今までの人間とは違う行動をとったその一人、まだ若い青年の様子をじっと見ていた。

「あ、ひ・・・駄目だ・・・やめ・・・」

青年が何かに怯えるようにその場から後ずさつた、次の瞬間

「てつ」

青年の体が赤いドロドロした液体に変わって、弾け飛んだ。衣服はそのままで、赤い水たまりの上に青年の着ていた服が浮かんでいる。

赤い液体はどうやら血ではないようだ、別の何からしい。

この光景を見てシオンとリドルは一瞬何が起きたか理解できなかつた。

「え・・・何、今の」

リドルが口をパクパクさせながら、やつと言葉を紡いだ。

「ひ、ひが・・・人が、溶け・・・あ・・んな・・・に・・・」

シオンも流石に動搖してまともに話せなかつた。

しばらくしたら赤い液体は地面に吸い込まれていつた。

土に吸収されたというよりは、何か別のものに取り込まれたという感じだつた。

「一体・・・何なんだよ、あれ・・・」

「人が、眠たそうにしてて・・・でも寝ちゃ駄目だつて言つて・・・そしたら、あんな風に溶けて・・・ああ、もう何が何だか・・・シオンとリドルが慌てふためいている時に、後ろから他の人間たちは少し違う足音が聞こえてきた。しつかりとした足取りのように聞こえた。

「・・・つ誰だ！」

シオンが叫んだら、足音が止まった。

後ろを振り向くと男性が立っていた。スース姿の長身でがつしりした体格の中年男性だった。サングラスをかけている。

「おう、俺だ」

スースの男は意味不明な返事をした。

冷静さを欠いているからか、気付くのが少し遅れてしまった。

恐らくこの男が敵で、それなりの実力の持ち主だったらシオンカリドルがとても生きていけないほどの傷を負わされていただろう。

「お、俺って言われても・・・」

リドルが少し怯えながらスースの男に向かつて弱弱しく言った。

「おうおう・・・悪い、名乗つてなかつたな」

ガハハと笑いながらスースの男は両手を腰に当てる。

「俺の名はビードゥー、一昨日この国に入つたばかりだ。連れが二人いる」

「ビードゥー・・・やん?」

「おう、お前らは?」

「あ、はい・・・シオンといいます」

「り、りど・・・リドルです」

ビードゥーと名乗る大男の雰囲気に気圧されて一人は少し怯えながら名乗った。

「シオンとリドルか。まだガキだつてのによく旅ができるな。やっぱお前らもあれか、“魔導師”か」
シオンの知らない単語が出てきた。

「マドウシ?」

「え、シオン知らないの?」

リドルは知っている風だった。

「魔導師ってのはね、魔力を導く者のことだ・・・要するに魔力を

自在に操れる人のことだよ

「魔力ってのは？」

「・・・本当に知らないんだね、シオン」

珍しい」ともあるもんだとリドルはシオンを馬鹿にするわけでもなく、本当に驚いていた。

「まあいいや、魔力っていうのは精神エネルギーのことで普通の人の中には見えないけれど空氣中にも人の体内にも、どこにでもあるんだよ」

「ふーん、まるで酸素か何かみたいだな」

「まあ、そう考えたほうが簡単だよね。で、それを自分の意思で操つたりできるのが魔導師」

「で、魔力を操ると何ができるんだ？」

「そうだね、色々あるけど・・・身体能力の強化とか魔具を扱えるつてことかな、とりあえず」

「魔具って？」

「魔法道具の略だよ。魔法や魔術なんかが使えない人でもそれを媒体にすることで魔法を使えるんだ」

「何かまた出てきたな、魔法と魔術って何だ。何か違うのか」

シオンがそういうた後リドルが何だか目を丸くしてシオンをじーっと見ていた。

「・・・なんだよ」

「いや、シオンの質問があまりにも的確すぎて感心した。おかげで説明がスムーズだよ」

「ほつとけ」

「・・・で、話を戻すね。魔法ってのはまあシオンも知ってるような火とか氷とか風とかを生み出す能力のことだよ。呪文や魔法陣とかで使えるやつね。・・・で、魔術ってのはそれとは違った特殊な

能力で人によつて使える魔術が違うんだ

「…・例えばどんなん？」

「うー・・・僕は魔術なんて使えないから良く分からぬいけど、どんなものでも液体に変える能力とか逆に固体にする能力とか・・・」

「何か使い勝手が微妙だな」

「でも魔法と違つて魔力を操るのが上手くなくても使えるし、上手く使いこなせば強力・・・らしいよ」

「そう本に書いてあつたのか」

「うん」

「お前本好きだからなー」

「おう、話が大分それてるんだが、そろそろいいか?」「あ、『』・・・ごめんなさい。ビリヨーさん」

リドルがビクツと震えて驚いたあと、ビドウーに謝つた。

「ビリヨーじゃねえだろ・・・」

小さくリドルに耳打ちした。リドルは「しまつた」という顔をした。

「おう、いいんだ別に。そんなビビんな、俺が傷つくビドウーは全く気付いていなかつた。」

「・・・いや、何かもう・・・すいません」

シオンとリドルが同時に謝つた。

「ガハハ、だから気にするなつて」

とりあえずもう一度一人は謝つておいた。

すっかり一人の緊張感は消え去つてしまつていた。

2・2 「魔導師、導くもの」（後書き）

リドル「さて、みんな分かつたかな？次回は四つのクリスタルと暁の戦士について教えるよ」

シオン「つかよ」

2-3-「アドバイス」(お薦め)

「アドバイス」(お薦め)は、何かに慣れていない人のために、その方法や技術などを教えること。

2・3「ビドゥー」

「お、とにかくお前らが魔導師以上である」とは確かだ。でなきやとつぐに夢魔にやられてる」

「夢魔つて、あの夢魔！？」

夢魔という言葉にリドルが驚いた。

この世界では夢魔とは人の夢に入り込んで、悪夢を見せて弱らせたあと魂を喰らう悪魔の一種である。

ある国では病として恐れられ、ある国では神の祟りとして恐れられている。

そして夢魔は一人を喰らつたら次の獲物にまた乗り移る。

「こんなにたくさんの人人が同時に……つてことは……」

それだけの数の夢魔が居るという事だった。

恐らく千や一千では済まない数なのだろう。リドルとシオンは恐怖した。

「だが、実際にこうしてそいら中に夢遊病みたいな状態の奴らがいるんだ。信じるしかねえだろ」

ビドゥーが親指で後ろを指差す。

彼の後ろでは呻き声をあげながらふらふらと歩き回る町の人間が數人いた。

「来るな来るな来るな……あ、」

ビチャッ

また一人溶けて消えた。

「ひとつと夢魔が近づいてくる恐怖。夢の中で奴らが身体に触れた瞬間に身も心も溶けて消えちまうんだ」

ビドゥーが消えていく人たちを嫌なものでも見るよつにして眺めていた。

「なんにしてもこの状況は異常だ、ここにいたら俺たちも危ねえしさつさと逃げ出したいところだが・・・」

ビドゥーが遠くに見える城を眺めていた。

シオンとリドルにはその眼は悲しそうにも、静かな怒りを秘めているようにも見えた。

「まあ、こっちの事情でそういうわけにもいかなくなつたんだな」シオンがその事情とやらを聞こうとしたが、ビドゥーの眼を見たら聞けなくなつた。

少し涙が出ているのが見えた。

「ねえ、ビドゥーさんの仲間って・・・」

リドルが聞いた。とても嫌な予感がした。

カツカツと石畳の上を誰かの歩く音が響き渡る

「たす、たすけっ」

バチュンッ

町中に敷き詰められた石畳の道が段々と赤く染まっていく。
悲鳴と共に。呻き声と共に。

「・・・」

シオンが歯を食いしばっている。

悔しさをこらえていたようだった。

「悔やんだところで止まつたりはしねえよ」

シオンの様子を察したビドウーがそう言った。

「逃げたきや逃げな。だが城門は閉まつてゐるぜ、中からせ開けられねえ」

何所からかまた呻き声が聞こえてきた。

「ねえ、さつきから気になつてるんだけど・・・」

リドルがシオンを心配しながらもビドウーに話しかけた。

「おう、なんだ」

リドルがそわそわとした様子で周囲を見回す。何かを探していくようだつた。

そしてその“何か”は見つからなかつた

「子ども・・・子どもがいないんだけど、あとお年よりも少ないしリドルの言うとおり、辺りにいるのは若い男女だけであった。年よりも殆どいない。

ビドウーの方が自分たちより状況を把握していくと黙つてリドルは質問した。

本当は何となく答えが分かつてはいたが、それが正解でないことを願いビドウーの意見を求めた。

その話を聞いてビドウーはゆつくりと溜息をついたあと、

「・・・多分だ、多分だがな」

ゆつくりと口を開く。表情が真剣だった。

「夢魔が喰うのは正確には夢じやなくて人のコロコロ、精神だ」
ビドウーが淡々と一人に説明をする。

「だからな、精神力の弱い奴ほど先に喰われちまうんだ……分か
るか、言つてることが」

ビチャ

「あんた、平氣なのかよ」
シオンがビドウーに言い放つ。普段は使つている丁寧語が普通の話
し口調に戻つていた。

「よくこの状況でそんなに冷静でいられるな」
ビドウーは何も言わずにシオンを睨む。
「こんだけたくさんの人人が死んでるんだぞ」
「死んでるんじゃねえ、吸収されてるだけだ」
「同じことだろっ！」

シオンが少しキレかかっていた。リドルが止めようとするが睨み合
う二人の前に尻込みしてしまう。

「おい、シオン」

ビドウーがゆつくりと口を開いて話し出す。

シオンは今にもビドウーに殴りかかりそうな勢いだった。

「お前、俺が今・・・冷静だつたな」

ビドウーが拳を握り締めた。

「俺が今、この状況下で“平氣”だと・・・そう言つたな」
更に強く握り締めた。

ビドウーが急にリドルの方を向いた。リドルが一瞬驚いてビクッと
震えた。

表情以上の強い怒りと、無念と、悲しさが感じられたからだ。

「リドルよお、さつき俺の連れがどいつか聞いてたな」

声を出すのも怖くなつたリドルが首の動きだけでイエスと答える。

「俺の連れはよ、一人は昔から一緒に馬鹿やつてたダチでよ。旅に
でてから今までずっと何十年も一緒にやつてきたんだ」

表情は少し穏やかになるが、握り締める拳からは血管が浮き出で
た。

リドルは氣付いてしまつた。

最初は彼らは理由があつて別行動を取つてゐると思っていたが、そ
れは間違つていた。

理由なんて無かつた。でも、別行動を取つていた。
考えられる答えは、

「もう一人は・・・なんつうんだ、その・・・昔から俺とそのダチ
によく引っ付いてきて小言ばっか言いやがる口づるさい奴でよ。女
なんだが俺たちが旅に出るときにはどうしても付いていきたいって言
うんだよ」

シオンも気付いた。

気付いてしまつた瞬間にビドゥーに対する怒りが全てどっこに消え
てしまつた。残つたのは虚しさだけだった。

「足手まといにしかならなかつたよ、正直。戦闘や力仕事は俺で、

料理なんかは相棒がやっていた。その女は体術もできなければ家事もできなかつた

ビドゥーの表情が穏やかになる。拳を握り締める力も少しだけ弱くなる。

「でもな、それでも居てくれて良かつたと思つてる。散々言い争つたりしたけども、よく考えたらガキの頃から三人で居ることが多かつたんだよなあ・・・」

ビドゥーが上を見上げた。ぼんやりとした灰色の空が広がつてこの国を覆いつくしていた。

そのまましばらぐビドゥーは黙つて空を見続けていた。

何も言わず、ずっと。

「俺だけなんだ、魔導師だつたのは」

ビドゥーがポツリと呟いた。

『魔力に対して抵抗力があるのは、魔導師以上の力を持つた者だけ』

抵抗力の無い人間は

ビチャ

ビドゥーは再び強く拳を握り締めた。

その隙間からはポタポタと血が滴り落ちてきた。

2・3「アドラー」（後書き）

ビドゥー「おう、鉄板をパンチで突き破れるぜ」
リドル「貴方は化け物ですか」

2・4 「アルプ、白き夢魔」（前書き）

夢魔の外見

何か幽霊みたいな感じにとらえてください
半透明の身体にひらひらの衣装です、はい

2・4 「アルプ、白き夢魔」

「……だからな、とっくに泣いたし喚いたりもした。お前よりもずつと小さいガキが母ちゃんの名前呼びながら“喰われた”瞬間も見た」

ビドウーは血が出ていてもまだ拳をさらに強く握る。
それは見ていてとても痛そうで、辛そうで、苦しそうで、悲しそうだった。

「残酷なまでに単純な摂理、弱い奴から死んでいくこの世界それが
気にいらねえ」

ビドウーは思いっきり地面を殴りつけた。

石畳の地面にヒビが入っていた、常人離れした力と拳の硬さだった。

「それ以上に自分の無力さが気にいらねえ……」

今度は更に強い力でもう一度ビドウーは地面を叩き付けた。

叩き付けた地面は地面に直径1メートルほどの大きな窪みを生み出した。

「なら、いい加減喰われてしまえばいいじゃない。諦めの悪い男
だこと」

どこからか女性の声が聞こえてきた。

辺りを見回してみるとシオンたち三人以外は誰も見当たらない。

「シオン、上！」

リドルが声を上げる。指差した先には白い装束を身に纏つた妙齢の女性が宙に浮いていた。

「まさか、あいつが・・・」

シオンが女性を睨みつける。

女性は不敵な笑みを浮かべてシオンたちを見下ろしていた。

「あらあら、また一人も上物が入ってきたわねえ」

「あいつが・・・夢魔、なのか？」

シオンがビドゥーに答えるもうつもうで行ったのだが、ビドゥーは答えなかつた。

「ふふふ、いいわ・・・その動搖、恐怖。あはははは」

女性が声を上げて笑い出す。

妙に耳に残つて嫌な感じのする声だつた。

「名乗つておこつかしら、私はアルプ。察しの通り・・・あなたたちが夢魔と呼ぶ存在よ」

アルプと名乗るその夢魔からはそれほど威圧感も感じなかつた。遠まわしに自分がビドゥーより遙かに強いと言つているのだが、シオンたちにはビドゥーの方がよっぽど強そうに見えた。アルプという夢魔からは思つたほど魔力を感じない。

「そして私がそここの男の仲間をつ」

アルプがそう言いかけた瞬間、顔の半分が吹き飛んだ。

「か・・・あ、あ・・・」

次にアルプの腹部に拳大ほどの穴がぽつかりと開いた。見ると先ほどまでシオンとリドルのすぐ近くに居たビドゥーが飛び上がつてアルプの目の前に来ていた。

「つるせえ」

ビドゥーが握り締めた拳をアルプに繰り出す。

「がふつ

ビドゥーの渾身の一撃でアルプはバラバラに吹き飛んだ。
赤い液体が雨のように辺りに降り注ぐ。

「す、すごいや」

リドルが驚嘆する。

「魔力を足に集中させて一気にジャンプ、そして今度は拳に集中させて一気に爆発させて・・・」「とにかくす」こののは分かった

少し興奮気味のリドルをシオンがなだめた。

ビドゥーが着地して溜息をついたあと一人に向かって言った。

「言つとくがこれで終わりじゃねえぞ」

「でも今のみたいなのがあると何体居ても敵じゃないよ、ビドゥーさん強いし。あれなら僕たちでも十分倒せる」

リドルがはしゃいでいるところにビドゥーがまた溜息をついた。

「ひどいわあ、いきなり殴るなんて」

地面から声がした。正確には赤い液体から、だつた。

「また“一人分”死んじやつたじゃないのぉ・・・」

赤い液体の零が中に浮かび上がり、どんどんくつついでいて大きくなつていいく。

「これであなたに殺されたのは・・・何人分になるのかしら」

次第にそれは人の形になつていき・・・

「でも大丈夫よ、まだまだたくさんあるもの」

ビドゥーに吹き飛ばされたはずのアルプの身体が元通りになつていた。

「再生能力・・・？」

リドルが言った。

「少し」

アルプがリドルの方を向いた。

その目を見てリドルは背筋がゾクッと震えた。

「少しう違うわ、ぼーや」

ふふふとアルプは笑いながら宙に浮かび、クルクルと回る。

「さっきのあたしは死んだわ。今の私は新しい私」

アルプの言っていることをリドルは理解できなかつた。

「いいこと教えてやるよ、俺たちの敵の数は・・・たつたの一人だ」

「それって・・・」

シオンが言いかけたが黙つておいた。もし間違つた仮定だとしたら・

・・・

「だが奴は喰つた人間と同じ数だけ命を持つている」

どうやらシオンの推測は合つていうようだつた。

最悪だつた。

喰つた人間の数だけ命があるなら、恐らく百回も一百回殺したところでの夢魔は完全には死なない。

たつた三人でどうにかなる相手ではなかつた。

「あと、3926人」

微笑みながら、アルプはそう言った。

「ち、また増えてやがる。昨日てめえと会つたときはその半分も無かつたじゃねえか」

ビドゥーが拳に魔力を込める。

「ふふふ、明日にはまた倍くらいになるわよお

2・4 「アルプ、白毛夢魔」（後書き）

アルプ「夢魔つてちよつといいやうしいイメージがあるけど、この世界では違うのよ」

リドル「いやらしげってどんな？」

アルプ「貴方・・・天然なの、それとも・・・腹黒」

リドルはエア ガを唱えた!!

アルプ「ああっ!!」

2・5 「能力、条件、戦闘開始」（前書き）

、を×にすると某アニメのタイトルっぽくなってしまうのは偶然で
しょり、きっと

2・5 「能力、条件、戦闘開始」

「ちゃんたらやつても仕方ねえ」

そう言つてビドゥーは魔力を込めた方の手でアルプを捕獲した。

「お前を千発ぶん殴る」

そう言つてもう両方の手で手招きしてアルプを挑発した。

「あら、挑発してるの。面白いわあ」

アルプが少し近づいてきた。

「私の能力・・・知つていて接近戦だなんて、馬鹿なのかしら、それとも・・・」

いきなり加速してビドゥーの皿の前に飛んできた。

「何か策でも？」

アルプがビドゥーに向かつて両手を伸ばす。

「殴るだけさ」

何故かビドゥーはその場から一歩も動かず、身体を「反らしす」とでアルプの手を自分に触れさせないように避ける。

「ただしつ」

拳をアルプに繰り出す。アルプは多少のダメージは覚悟していたので気にはせずビドゥー身体を触るつとする。

ドスツ

拳がアルプの腹部にめり込む。

「がふっ」

アルプは苦しみながらもビドゥーに向かつていぐ。

(これは痛い・・・けど、まだ命はたくさんある。 10人分くらい

使つても「トイツを喰う！」

そう考へてゐると、腹部の痛みがどんどん激しくなつてきた。
まるで何度も同じ場所を連續で殴られたかのように。

「あ、あがつ！！」

痛みはどんどん激しくなつていき、アルプは耐え切れず、その場に倒れこむ。

「あががががががが！」

痛みは全く止む気配を見せらず、どんどん強くなつっていく。

「千発、だ」

「は・・・はがつ、あ・・・・あつ！…！」

常人なら最初の一発目でとっくに弾け飛んでしまう威力のビドウーの拳を腹に受けて、アルプはしばらくもだえ苦しんでいた。
喰つた人間の数だけ命があるアルプは、腹が吹き飛んでもすぐに再生する。

だがまたすぐに腹が吹き飛ぶ、再生する。それを何度も繰り返して
いた。

ほんの数秒の出来事だった。

「す・・・すゞい、」

リドルとシオンが驚嘆した。

「何が起きたんだよ・・・一体」

「だから言つたろ、千発殴つたんだって」

ビドゥーが殴つたほうの手を押さえながら言つた。

「ち、意外に硬いな・・・トイツ」

その手は出血で真っ赤になつていた。

「でも殴つたのは一発で、それにその怪我つ！」

リドルが慌てて持つていた鞄から消毒液と包帯を取り出して手当て

をしようとしたが、ビドゥーが手を突き出して無言で「今はいい」と伝える。

「それが……“魔術”か
シオンが言った。

「おう、シオンてめえやつぱり賢いな」
ビドゥーは最初に会った時と同じような口調になっていた。だが、顔は笑っていないし、冷や汗が出ている。

「俺の能力は“千手觀音”^{ノック}。相手を一度殴っただけで千発分のダメージを与える術だ」

発動条件は対象に向かつて「お前を千発殴る」と言ひ「」こと。
そして言つたあとはその場から一步も動かない」と。
条件は厳しいが、一発で石畳に小さなクレーターを作るほどの威力

なので、喰らつたら確実に・・・

死ぬ

「だがきつちり千発殴つた分の反動をこつちも受けちまつのが痛いんだな、つたく」

ビドゥーがそう言つて、シオンとリドルを手招きした。

「なんですか？」

ビドゥーは一人に手を上げるように指示した。一人は言つとおりにする。

パン、パン

するとビドゥーは何故か一人とハイタッチを交わした。

何の意味があつてやつたか分からぬでいる一人にビドゥーは説明する。

「俺のもう一つの能力“選手交代”だ。これを駆使して奴を倒す

ハイタツチを交わした相手となら瞬時に位置を入れ替えることのできる能力。

対象とハイタツチをしてから三十分以内、目視できるか半径100メートルに対象が居ることが発動条件。

能力名を叫んだあと、対象の名を言つことで発動できる。

「いいか、もうアイツに“ノック”は当てられねえ。だがアイツを倒すにはこれじゃなきゃ無理だ。並みの攻撃じゃ奴を殺しきる前にこっちが消される。・・・だからお前たちはアイツに触られないようにしてギリギリまで近づけ」

そして、“シフト”で一気に間合いを詰めて“ノック”を放つという作戦だった。

「最低三回は奴に当てる必要がある。だが気をつけろ、奴の手には絶対に触れるな」

リドルが聞く。

「なぜ？」

「昨日奴と戦つたときに分かつたことだ」

ビドゥーは説明した。

アルプの能力は“夢喰バク”

相手の夢の中に入り込み悪夢を見せながら命と魂を削る能力。魔力を操れるものには抵抗力があり、ほとんど効かない。

もう一つの能力は“魂喰ソウル・バク”

直接両手で触れた相手の魂を一気に喰らう能力。

抵抗の無いものは一瞬で、あるものは数秒で溶かされて吸収される。

「アイツ余裕かましてペラペラと喋つていきやがった。それでも勝つ自信があつたんだろうな」

「この夢の中みたいな空間はアイツの能力とは別なのか？」

シオンが聞いた。ビドゥーが頷く。

「別の奴の能力だろうな。敵か味方か……とにかくその事は後だ」

「アイツに触わられずに、アイツに近づく……」

リドルが言った。何か考えているようだった。

「お・・・しゃべりは、もう・・・終わった?」

アルプがよろよろと立ち上がってくる。

「私が千人も死んだわ、こんなのは初めてよ。屈辱」

アルプが三人を睨みつける。

睨まれただけなのにものすごい威圧感を感じる。

夢魔が本気で怒りをあらわにした瞬間だつた。魔力があふれ出し、周りの地面や建物の壁がビキビキとひび割れていく。

「お前を、千発殴る」

ビドゥーがアルプを指差して言った。

「どうぞ、できるものなら」

アルプは笑つていなかつた。

だが、絶対に当たらないといつ血信に満ち溢れているように見えた。

(・・・頼んだぜ、ガキども)

「あなたは後にして、まずあの子達から頂くことにするわ

アルプがシオンたちの方に飛んでいく。

「来た、やっぱり俺たちが先か・・・リドル!」

「大丈夫、僕がやる。援護お願い!」

リドルはそう言って鞄から魔道書を取り出した。

シオンも上着の裏側に隠してある投げナイフを数本取り出して構える。

「まだ魔術は使えないけど、僕には“風”がある。シオンもいる!」

だから負けない！」

魔道書が光りだしてリドルの周囲に風が巻き起こる。

「ほほほほほほほほほほほほほほ

高笑いをあげながら猛スピードでアルプが一人の方に近づく。

「行くぜ！」

「うん！」

2・5 「能力、条件、戦闘開始」（後書き）

リドル 「ちなみに空を自由に飛べます、魔法で」
シオン 「魔力で無理やり脚力を強化すれば、空中でジャンプとかできちゃう」
アルフ 「素で飛んでます」
ビドゥー 「垂直飛びで10メートルは軽くこけるぜ、ね？」
(・・) 「聞かないでトセー」

2・6 「穂やかな風と共に」（繪書モ）

戦闘つて描くが難しい、下手で下さいません

2・6 「穏やかな風と共に」

「・・・」

向かつてくるアルプにシオンがナイフを投げつける。

「そんなもの・・・！」

ナイフに通った僅かな魔力を感じたアルプは瞬時にそれをかわした。

「ふうん、やるじゃない」

ナイフは直接当たってはいないが、ナイフを覆っていた魔力の刃がアルプの頬をかすめていた。

アルプがリドルから目を離してシオンを警戒している間に、リドルは呪文を唱える

「風の都に吹き荒ぶ、旋風纏う我、風神」

緑色の風エアリアルがリドルの周囲を包み込み、羽衣の様な形になった。

「空創空操、行くよ」

リドルが手で空気を払つた。同時に突風が巻き起こりアルプに襲い掛かる。

「くつ・・・！」

アルプはリドルの周りに漂つている羽衣を見て、リドルが何か魔法を使つたと推測した。

(恐らくあつちの子は風使い。そしてあの羽衣は風を操るための魔力の結晶体・・・！)

アルプが手からいくつもの魔力の塊を弾丸のようにリドルに向けて放つた。

するとリドルのまわりの羽衣が形を変えてリドルの盾になつて、弾丸を防いだ。

(なるほど・・・形状変化もできるのね、状況によつてはあれで直接攻撃する」ともできるつてことね)

「だつたらいいわ、先に・・・」

アルプは飛んできたナイフを難なく避けた

「こつちの坊やを先にいただくから！！」

アルプはシオンの方に向かつてきた。シオンは身構える。

アルプがシオンの田の前に両手を突き出してきた。

それをシオンはギリギリで避け、アルプの後ろを取る。

「もうつた！」

「後ろを取つたくらいでいい氣に・・・！」

ただ一人戦闘に参加せず状況を冷静に見ていたビドゥーが動き出す。
「選手交代、シオン！」

アルプが振り向いた瞬間そこにシオンは居なくて、代わりに拳を繰り出してくるビドゥーが居た

「もう千発、喰らつていきな」

ビドゥーの拳がアルプにめり込む。

「が・・・あああああああ！――！」

もだえ苦しむアルプにビドゥーは指を差しながら

「お前を千発殴る」

そう言つた直後アルプに再び拳を繰り出す

۲۰۰

アルプがビドゥーに向かつて両手を突き出す。

既に一千人分の命を削り取られているアルプはかなり逆上していた。

（くくく、命が多い分ダメージを省みないとこりが仇になつたな。
今更焦つても遅いんだよ）

ビドウーはアルプの片手だけかわして、もう片方の手にハイタッチをした。

• • • ! ! ?

アルプはビドウーの行動の意味が理解できなかつた（何こいつ・・・自分からやられにきた・・・？）

ハイタツチをした」とによつてビードウーには隙が出来ていた

(でもこれは・・・好機!)

アルプはビドゥーに向かつてもう片方の手を再び伸ばす。

「シフト」

「シオンー！」

ビドゥーとシオンの位置が入れ替わった。

(・・・な！？)

突然のこと驚くアルプをよそに、入れ替わったシオンはアルプの手を避けて剣で一撃を打てる。

「ぐわわー！」

悶えながらもアルプはシオンに手を伸ばす、だがそれを全てシオンは避けた。

(馬鹿な・・・何なのこの動き、人間ではありえない！)

シオンは再びアルプを斬りつけた

「があうつー！」

アルプはシオンの背中に羽衣が羽のように形を変えてくつ付いていふことに気が付いた

(身体強化・・・いえ、羽のような形状からすると恐らく移動を補助するだけのものね。ここまで対応力のある魔法を扱うなんて・・・)

だがアルプの疑惑はそれだけではなかった。

(たとえ移動速度が上がつても私の手の動きを見切つてかわすなんて常人には到底不可能！・・・動体視力、反射神経が優れているといつレベルの問題ではないわ、これも魔法ね)

「甘く見ていたわ」

アルプは中に浮かび上がつて3人に向けて言った。

(・・・ちい、落ち着きを取り戻しやがつた。できればもう一発当てておきたかつたんだが)

ビドゥーは舌打ちをした。

残りは最低でもあと2発、だがアルプの不意を突かなければ“千手観音”を当てるとはできない。

だがビドゥーはもう一つ警戒していることがあった。

(あの一人の坊やのやり取りから小さいほうを黒髪の方がサポートするのだと思つたけど・・・逆だつた、あの驚異的な身体能力で私の攻撃をかわしつつ接近。避けきれないのは小さいほうがサポート・・・)

アルプの身体から魔力があふれ出してきた

(ということはひとまずあつちの男は無視しても大丈夫、残つた二人のうちのどちらか一人を攻略すれば私の勝ち・・・!)

「やはりか・・・“命”を削つて魔力を上げてやがる」

アルプは残つた命を数百人分ほど使って自らの魔力を爆発的に上げていた

「さしづめ命の濃度を上げているつてところか・・・」

(だがこれは好機でもある、これで奴を一度でも殺せば残りはあと僅かのはず・・・)

(俺もあと一発分で限界・・・持久戦は不利・・・!)

ビドゥーの腕も限界が近づいていた

皮膚は全て擦りむけて腕は血で真つ赤に染まつっていた

「これ以上無駄に死ぬわけにはいかないの、私には成さねばならぬことがあるから」

アルプの身体から溢れ出る膨大な魔力の影響で近くの建物がびりりと溶けていく

(あの目に見えるまでに高濃度の魔力・・・あれに触れても常人なら即死だろうな)

「そうかい、俺も同じさ。俺にも成さねばならないことがあるんですね」

殆ど感覚のなくなってきた腕に力を込めようとしながら、アルプを指差す

「お前を千発殴る」

2・6 「穏やかな風と共に」（後書き）

リドル 「あつはつは、エア ガ、エ ロガー————！」

シオン 「刀流+乱れ ち」

ビドウー 「ため！」

アルプ 「ドレ ンタツチ」

2-7 「戦闘中、思考中」（前書き）

始頁の前書きあと後書きも、あんまり見ないほうがいいかもです

2・7 「戦闘中、思考中」

「もうあなたたちの戦闘パターンは把握したわ、だからもつれてしま
い」

言つた瞬間視界からアルプが消える。

「・・・リドルッ！！」

シオンが叫ぶ。

アルプが一瞬のうちにリドルの背後に回っていた。

シオンの声を聞いた瞬間リドルは羽衣で鎧を作り自身を包んだ。アルプがリドルに触れようと両手を伸ばすが鎧に阻まれる。

「・・・く・・・ううつ・・・」

鎧が風を巻き起こしてアルプを押し返そうとするが、それでもアルプの手はリドルに近づいてくる。

「ぐつ！」

声を上げたのはアルプの方だった。

アルプの腕にはナイフが刺さっていた。

「リドル退がれっ！」

シオンが叫ぶとリドルは後ろに飛んで退いた。

「でえええいっ！」

シオンが思い切り斬りかかるが、避けられる

「ガキいいいいいい！」

アルプがシオンに手を伸ばす。しかし伸ばした手がシオンに触れる瞬間弾かれた。

(また風か・・・つ)

「ちい・・・つ」

アルプは舌打ちをしながら風を振り払う。

(まづいな・・・)

タイミングを計っていたビドゥーは一人がアルプの背後をとつたらすぐに“選手交代”をして攻撃を仕掛けるつもりだった。

(夢魔の動きが予想以上だ・・・あれだけ素早く動かれちゃいくらい人がかりでも後ろを取るのは無理だ・・・それに)ビドゥーは全く動かなくなつた自分の片腕を見た

(もう駄目だな・・・この腕、死んでやがる)

さつきから動かそうとしても激痛が走るだけで腕は殆ど動かない。血が乾いてそれ以上の出血は止まつたが、はつきりいつてもう動きの邪魔にしかならなかつた。

(“千手觀音”はこつちの腕でしか使えねえ・・・そういう条件の能力だ)

無いほうが体が軽くなるのでいつそ引き千切つてしまおうかともビドゥーは思ったが、まだ使い道があることに気がつく。

(まだ牽制程度にはなるか・・・だが一度目はねえな、感づかれる)

ビドゥーの腕が使えないことはビドゥーしか知らない。

それを利用してシオンカリドルと“選手交代”して突然アルプの目の前に出れば、当然アルプは“千手觀音”を警戒して一瞬動きが止まる。

止まらないにしてもほんの僅かな時間、コンマ数秒でも動きが止まればシオンがアルプに攻撃を当てられる。

（なぜ魔力で身を固めた夢魔に傷を受けられるのかは置いといて、あいつの斬撃をまともにくらえばこの押されている状況から一気に逆転だ）

勝負の鍵はアルプがビドゥーにどれだけ警戒をしているかという所だった。

戦闘には参加せず傍観している状態のビドゥーに攻撃を仕掛けない理由はいくつか考えられる。

一つはただ単に後回しなのか、これは良くないパターンである。もしアルプに三人同時に相手をする余裕があるので奇襲を仕掛けても対応される恐れがある。

もう一つはシオンとリドルの相手で手一杯なのか、これは最悪のパターンである。アルプに“勝てない”と判断されたらまず間違いなくアルプは逃げる行動をとる。そうされたらまだ残っている人間を根こそぎ吸収してさらに魔力を強化して再びこちらに向かってくるだろう。この国の人都を全て犠牲にするつえこちらも吸収されてしまふことは完全な負けに等しい。

そしてビドゥーが想定している“アルプがビドゥーを警戒しつつ、シオンたち一人とはやや優勢気味に戦っている”状況が最良のパターンだった。

その場合アルプは“あの男の攻撃を喰らうべきしなければいい”と思っているだろう。そうするとシオンたちには積極的に近づこうとするが、ビドゥーとは何かあっても対応できる距離を保とうとする。仮説が正しければアルプがもつとも神経を使っているのは、“選手交代”でビドゥーが出てきた時に即座に対応できるよつとするところだ。

たとえ多少のダメージを喰らおつともビドゥーの“千手觀音”だけには当たらぬようにする。

アルプがビドゥーを恐れれば恐れるほどにのフェイントの成功率は増す。

(きつい賭けだがやるしかねえ・・・成功か、死か・・・だ)

「はつ、やるじゃない。魔力で覆つた私の身体に傷をつけなんて」
アルプはシオンに向かつて叫びながら考える。

（でも考えられない・・・物理的な硬さで言えば鉄よりも硬くなつた私の身体に、僅かな魔力しか通つてない投げナイフなんかで傷をつけるなんて・・・）

アルプはビドゥーとリドルの能力は把握したつもりだが、シオンの能力はまだ基本的な魔力による物質や肉体の強化しか見ていない。（魔法も魔術も扱えないという可能性もあるけど・・・いえ、もしかしたら・・・）

アルプの仮説は正しかつた。シオンは既に能力を使つていた。
相手の魔力を切り裂く魔法、シオンが唯一使える魔法だつた。

シオンはこの世界では非常に珍しい“無”の魔法を扱う人間だつた。（因みにリドルは“空”、ビドゥーは“時”と“空”的魔法を現時点で使用している）

“無”的魔法は他の全ての魔法とは隔絶された存在。
他の全ての魔法を消し去る特殊な魔法。

“無”的魔法を扱う者に対し、魔法使いたちは完全に無力となる。

この場合はシオンの魔法は不完全なので剣やナイフを媒介にしないと発動しないようだが、相手の魔力がどれほど強大でも“無”でそれを切り裂いて無防備な相手に直接ダメージを与える・・・この状況でアルプを攻略する唯一の手段だつた。

2・8 「夢は醒めるもの」

「さあ、そろそろ終わりにしましょう・・・」

どちらが倒れるにしても、もう次の一手で全てが決まる

「死ぬ前に教えてあげようかしら、この国のこと。『氣になるでしょ
う・・・』この国に入つてから感じる違和感、その正体が」
穏やかな笑みを浮べてアルプが語りかけてくる。

「IJの國は王の見る夢、王が見る夢を具現化した世界なの」

「・・・？」

三人ともいっていることによく理解できないで居る。

「IJの國の王の能力は“夢可遊興”^{ムートレジ}、夢で見たものをそのまま現実
へと具現化する力」

「なるほど、とするとこの國の中は王の夢の中に等しいって訳か。
どおりで夢魔であるお前が存在していられるわけだ」
ビデウーが言うとアルプは笑顔で肯定を示す。

「王は現実に失望し、疲れていた。せめて夢の中では自分が王とな
り理想とする世界を求めた」

アルプはまるで思い出を語るように三人に話す。

「でもその王の望みも叶わなかつた。この夢の國にも様々な欲望を
持つた人間がやってきた」

三人は警戒をしつつもアルプの話を聞いていた。

「王は絶望した、夢の中にすらも自分の求めるものが無いのだから。
だから・・・」

そこでアルプは言葉を濁した。

「いえ、今更話しても変わらない」と
右手に魔力を集中させる。

「ああ、そうだな。お前さんが何を考えているか、何をしたいか、
それは俺たちには関係の無いことだ」
ビドゥーが言い放った。

「そうよね、あなたは私が憎い、憎くて仕方が無い・・・殺しても
足りないくらい憎い」

「そんなんじゃねえよ」

しばらくの間静寂がその場を包み込む。
アルプもビドゥーも何かを悟つたような顔をしていた。

「さて、そろそろか」

ビドゥーがそう言ってアルプの方ではなくリドルの方を見た。

「・・・？」

アルプは訝しげにその様子を見る。そしてあることに気が付く。

「・・・ああ、油断したわ」

アルプは身体を動かそうとしたが、全く動かなかつた。

「何かしら・・・金縛りでもないし、やはり・・・大気の壁?」

「まあそんなどこ、大気を圧縮して両手両足を固定したからまず動けないよ」

少し長い時間をかけてリドルが発動した大気圧縮の魔法“空氣結塊”エアーリードロップがアルプの動きを封じていた。

「・・・ああ、あっけないものね。これで私は負けたのね」
それにしてはアルプは全く悔しそうな素振りを見せない。

「さて、俺はお前が降参しようがしまいがお前をぶち殺したいんだが」

ビドウーが拳を構える。神経もボロボロになつてゐるなか、僅かに残つてゐる感覚を頼りに身体を動かす。

「そうね、私が降参しようがしまいがあなたの腕も、身体ももう・・・

・

アルプはビドウーの腕が既に使い物にならないことに気付いていた。
気付いていた上でわざと知らないような振りをしていたのだつた。

「お前さんも相當来てるな、分かつてなぜ・・・

「あら、あなたと同じような理由よ」

シオンとリドルは黙つて一人を見ていた。

何となくだが手を出してはいけないような気がした。

「お前を千発・・・ぶん殴る」

腕はとうに限界を過ぎていた。

氣力の問題だった。

「最期に言ひ事は」

ビデウーが夢魔に尋ねる。

「そうね・・・」

夢魔はゆきくつと口を開く

あなたは人間、私は夢魔・・・だけど

「愛してる」

2・9 「愛しい夢、貴方の夢」

「憎いとか憎くないとか……そんなんじゃねえよ、今更……」

ビドゥーは語りかける

「あのときお前から一人を庇い切れないと俺は判断した、それは良かったんだ……それは」

蹲っているアルプに語りかける

その肉体は腹のあたりから下が吹き飛んで無くなっていた

「じりりを庇うか……そんな選択肢しか出せねえ俺が……」

ビドゥーは語りかける

「許せねえ……」

夢魔に語りかける

「俺が身代わりになつてでも・・・一人を逃がしていれば・・・」

既に死に須へしてしまつた夢魔の亡骸に向かい

「許せねえよ・・・自分が・・・」

語りかける

そしてその直後に口から血を吐いて倒れる
ビドゥーの周りに真っ赤な水たまりができる
すでに動かなくなつた夢魔と、もうじき動かなくなる人間の身体が
生温い真っ赤な、鉄鎧の匂いのする液体に漫される

「ビドゥーさん・・・」

リドルが悲しそうな目で倒れた二人を見つめている

「死にたがつてゐるようになつしか見えなかつたな・・・二人とも。自分
が許せない、だから自らここでえられる罰を・・・報いを求めてい
た」

「大切な人を失う悲しさ、苦しさ、辛さ、寂しさ・・・そして自分を許せないというやり場の無い怒り、そしてその後に生まれてくる虚無感・・・」

「もう俺たちに知る術は無いけれど、ビドウーさんと・・・この夢魔にとつてそれを失うということは精神的な“己の死”を意味していたんだよ、きっと」

「この国の王様だけ・・・夢魔も人間に恋をするのかな」

「人間には理解できない次元なのかもなあ・・・」

「きっと王様の夢も・・・もうすぐ終わるんだよ・・・」

「魂が抜けて虚ろになつた肉体は、腐り朽ちて土に還る・・・」

「死んでしまつたらその人には何も残らない・・・たとえ墓ができる、残された家族がいたとしても・・・死んだ人には、もう何も残らない・・・」

「悲しいね」

そして夢が醒めて、全てが溶けて地に還つた

残されていたのはシオンとリドルの一人だけだった

「すっかり夜だな、これじゃあ野宿だ」

シオンが言うとリドルが大げさに反応して

「なつ！…今日こそこはふかふかもふもふなベッドで寝れるとと思つた
のに・・・話が違つよ…」

「何の話だ」

結局夢の国が消え去つて何も無いただの荒野で野営をすることにした

火が小さくなつた焚き火が生み出す幻想的な明かりと、静寂の中聞
こえてくるパチパチという薪が燃える音に一人の会話が加わる

「誰かを殺したり、苦しめたりする力は要らないって今まで思つて
いたけど・・・やっぱり、力が無いと守ることもできないんだよね
・・・」

無言で答えるシオン。構わずリドルは話し続ける

「ピドウーさんもきっとこう思つてたよ、一人を守りきつて自分も

生き残る・・・その選択肢を選ぶことができるほど）の力があつたら・

・・つて」

「・・・でも、お前は人を傷つけるのが嫌なんだろ？」

シオンが質問すると少しリドルは俯いたが

「・・・次は、僕もちゃんと闘うよ。大切な人を、自分の命を、意志を、失いたくないものを失わないようにするために・・・使えるものは全て使う。できることは全てする」

（・・・そして必要なら、僕は）

「・・・なら俺ももっと強くなる。結局あの人助けられたから・・・あの人人が今度は自分が身代わりになるという選択肢を選んだから・・・」

だから、もつと強くなる

誰一人として涙を流すことの無い、そんな幸せな世界でいてほしいから

不可能なのは分かっている、でも認めたくない

認めたら、また俺は弱いまま何も出来ずにいそづだから

「さて、いい加減もう寝るわ。明日は夜明けごろに出発だ」
「うへえ・・・せめてあと5時間くらい、お直出発にしない?」
「譲歩のしようが全く無いんだが。それにそしたらまた一日ふかふ
かもふもふベッドが遠くなるわ(そんな高級なところには絶対に泊
まらないが)」

「ぜ、善処します」

そんな言葉を語つ奴が本当に善処した試しが無い

「嗚呼・・・せめていい夢でありますよ」
「お前の夢つて・・・なんか混沌としてるんだね」
「なんですか!」
「いや、だって・・・」
「……」
「……」

そんな他愛の無いことを喋るついで一人はまどろみの中へと沈んで
いった
そして夢を見て、目が覚めたらまた旅をする

そしてまた夜がきて、夢を見て・・・

夢が醒めたら、また旅をする

夢はいつか醒めるもの

命はいつか果てるもの

だつたらせめて、その僅かな間だけでも

いつか終わりが来るその瞬間までは

優しく包まれていきたい

3・1 「出でること想ひの中だ、私は」

私はとある理由があつて世界中を旅している。

私の名前、そして旅の理由はこゝには記さないでおく。
どちらも聞いたところど、これを読んでいる諸君の知的好奇心に応
えるだけの面白い内容ではないからだ。

だが私にとっては私の名前と旅の理由は、今の旅人である私を構成
する大きな部分であつた。

前置きはさておき、本田とある国のある町で一人の旅人に出会つ
た。

彼らの名前は伏せておこう。許可も無く他人の情報を載せるのは、
その情報の確度に関わらずあまり褒められた行為ではない

と、私は思つ

その一人はまだ年端も行かぬ少年で、一人は十代半ばでもう一人は
それより少し下・・・といったところだった

その年で旅をするところとは余程の理由があるのであつ。まさか
この御時世にビリヤードの金持けの道楽、と言つわけでもあるまい

兄弟にも見えたが、互いの会話や田や髪の毛の色の違になどからビ
ュやうそつではないと思われた。

両親など家族は全ていないのであつ。容易に推測できる。

旅の理由も恐らくそれが関係しているのだろう

と、私は思つ

だから私は彼らに旅の理由を聞くつもりは無い。私は聞かれたら応えるつもりだったが。

彼らも私に気を遣っているのだろう。そういう話題には触れなかつた。

始めは互いに警戒をし合っていた。旅をする上で自分以外は全て敵と仮定して行動するのが一番安全だ。疑心暗鬼は目に見えない敵を生む代わりに生存確率を大きく上げる。

だが小さいほうの少年のあつけらかんとした態度と発言、行動につかり私も（恐らく相方の大きいほうの少年も）毒氣を抜かれてしまい、そこからはずつかり打ち解けてしまった。

その小さな少年は常に明るくは振舞つていたが、時々遠くを見るよう、何だか今にも消えてしまいそうな悲しげな表情を見せた。

そのときの私は、薄く曇つていた。

私はこの少年の今まで経験してきた苦悩の欠片を垣間見た気がした。

まだみんなに幼い、あまりにも幼い少年がどれほど 苦痛を味わつてきたのか

それは私には想像しえないほどものなのだろう

と、私は思う

だが、きっともう一人のあの少年・・・

彼がきっとこの少年の何かを変えたのだろう

彼と話すときの少年は生き生きとしているように私には見えた

持ちつ持たれつだな・・・

と、私は思つ

翌日、彼らは旅立つた。

別れは必然のことだとは思つていとも、やはり名残惜しかった。

私は「君たちの旅に、光がありますように」なんて気取つたことを言つて別れを告げた。

彼らは嬉しそうにこいつと笑つて歩き出した。

話を聞くと、どうやら彼らが次に向かうのは水の都として名高い「ヴェルネ」へ向かうらしい。定期船に乗つて隣の大陸に渡るつもりだろう。

私は噂の「夢の国」に行こうと思ひ、そのことを彼らに話したらなんとも気まずそうな顔をして「その国はもう無くなりました」と言った

まさか内乱でも起きて滅んだのだろうか……「夢の国」が？
彼らは喋りたくない様子だったので聞かないことにしたが……やはり気になる

どちらにせよ通る道なので、確かめに行くことにした。
急ぐ旅でもない、気ままに行こうと思つ

と、私は思つ

「魔法使い」と「もの」を「の」で見る

それが私の旅の目的の一つだ、理由は言わないがそのために私は旅をしている
しかしここで止めるのだから……

存在するところのはじから確からしいのだが……

だが居るとしたらその人物は……
きっともの凄い年をとった老人に違いない

と、私は思つ

4・1 「Black room」

どうしてかしら

この世界はどうして私たちに冷たいのかしら

私たちはただ・・・

人として生きていたい

それだけなのに・・・

神様はそれすらも許していくださらないと言つの?

私たちに人として・・・

この世に生きる資格など無いと仰るの?

ねえ、答えて・・・

私たちを助けて・・・

この血生臭くて、薄暗い部屋から私たちを連れ出して・・・

私たちを救い出して・・・

・・・もう、狂つてしまいそう

死にたい・・・でも、死ねない・・・

「姫ちゃん・・・」

「ひなちゃん・・・

「姫ちゃん・・・」

私が・・・ひなちゃん・・・

「姫ちゃん・・・」

ひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃん
ひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃん
ひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃん
ひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃんひなちゃん

・・・・・

たとえ心が壊れても、この子だけは守らなきや・・・いけない

「大丈夫よ、私はここにいる」

そのためだったら、どんな犠牲を払っても構わない・・・

世界が私たちを「ごみ」のように扱うのなら、私たちも他の人間を「ごみ」のように扱えばいい

痛みは痛みでしか返せない

いまさら優しさなどで癒える事は無い・・・

それだけの、深い傷

決して消えない傷が私たちを少しづつ壊していく・・・

でもその前に、私たちは壊していく

私たちを助けてくれなかつた神の作った・・・
こんな薄汚い欲望の塊でしかない人間が・・・
まるでコケのように湧いて溢れかえっている腐りかけた世界を・・・

「ああ・・・もう寝ましょう、そして明日はたくさん遊びしちゃうね・

•
•
L

壊せるだけ壊していく

4・2 「得意不得意」（前書き）

教えてリドル先生、第二段開幕

4・2 「得意不得意」

「す、」いよシオン、街中水路だらけだよ、ほらほら
「そんなにはしゃぐようなことか・・・？」

シオンとリドルは水の都と呼ばれる街に来ていた。
さすが水の都と言うだけあって、いたるところに水路が張り巡らさ
れている。

わざわざ井戸にまで水を汲みに行かなくていいので、便利と言つた
ら便利だが、水路の向こう側に渡るためにわざわざ遠回りして橋を
渡るか船に乗るかしないといけないので、不便と言つたら不便だ。

「うーん・・・」

「ん、どしたのシオン」

何故かはしゃいでいるリドルが浮かない顔のシオンに尋ねる。

「いや、最近ここで何かあったのかな・・・ってさ」

街に入るときに荷物のチェックが妙に念入りに行われたので、シオ
ンは少し違和感を感じた。

ただ単に人の出入りに関して厳重なだけなのかもしれないが、それ
にしてはチェックをしている人間の手際が悪く、どこかぎこちない
感じがした。

「何かここ最近から急に警備を強化したみたいな感じだったんだよ
な・・・」
「ということはさ、そろしくちゃならないような理由があるわけ
だよね」

シオンは首肯する。

「何か事件でも起きたか、それとも・・・」
そう言つてシオンはしばらく黙り込む。

自分としては早く街の中を見て回りたかったので、リドルが少し苛立つ。

「考えるのは後の話だが、まずはこの街のすばらしさを堪能しようではないかシオン君」

「お、おい」

結局我慢できなくなつたリドルがシオンの手を引っ張つて水路に泊めてある小船の方に向かっていく。

「歩かないで街を回れる・・・なんて素晴らしい街なんだー。」

ああ、そういうことか。とシオンはリドルの相変わらずの怠慢なこ溜息をつく。

リドルなら魔法で空を飛んだりして移動するのも可能だが、それも結構な精神と集中力を消費するので（それに人前で魔法を使うのはあまり好ましくないため）、余程のことが無い限りは徒步で今まで移動してきた。

「もつと燃費のいい移動用の魔法は無いものか・・・」

船主に渡し賃を渡してとりあえず街をぐるっと回つてしまつとした。

「お前が使つてる移動用つていつたら・・・あれか、背中に羽生やすやつ」

といつてもそれはシオンが知つてゐる中のものであつて、もしかしたらリドルはシオンの知らない魔法を持っているかもしれない

「ああ・・・あれは何というか・・・見た目に拘りすぎた、うん。」

イメージしやすいからすぐに出せるんだけど燃費が悪いんだよねえ。
・
・

基本的に魔法や魔術はイメージするだけで使えるもので、使用者がイメージしやすいほど精度や威力が増す。

魔法を使うものを便宜上魔法使いと呼んでいるが、実際は普通の人間と何も変わりない。

ただ、常人より精神力、集中力、想像力などが強いもののことである。

平たく言うと善悪問わず「心」が強いものことで、後天的に魔法が使えるようになるのである。

だから魔法使いの中には過去に辛い経験をして精神的に強くなつた者や、芸術的センスがすぐれた者が多い。

前者は「魔法」を、後者は「魔術」を得意とするケースが多い。両方に一致するものは、魔法と魔術を両方得意とするので俗に「賢者」などと呼ばれている。

「火と風と水の魔法が巧く使えばもつと簡単に空を飛べるんだけどなあ・・・」

10段階で評価すると、リドルの魔法のレベルはおおよそ

火	・	・	3
水	・	・	5
風	・	・	8

である、ちなみにレベル1が「常人」、3が「該当属性の魔具が扱える」、5が「該当属性の魔法が扱える」、レベル8は「天才」の域である。

「姉さんなら・・・火の魔法が得意なんだつなあ・・・性格上」「お前の姉さんなんだからそりやもうすごいんだろうな・・・」シオンは笑顔で爆炎を撒き散らす小柄な少女を想像した。少し身震いがする。

「あ、絶対変な想像してる」

リドルが訝しげにシオンを見ている。

4・2 「得意不得意」（後書き）

(. .)
・・・感想とかくれたら嬉しいな、なんて・・・
いや、何でもないです。戯言でした、はい

4・3 「我が姉何処」（前書き）

リドルは日本語で「謎の人」といいます

4・3 「我が姉何処」

リドルの旅の目的の一つ、それは唯一の肉親である姉を探すことだつた。

直接聞いたわけではないが、リドルが両親を亡くしたこと、それが姉と離れ離れになつた理由の一つだといつことはシオンは察していた。

どうこつた経緯でそつなつたかは聞くつもりはないし、聞きたいとも思わない。

軽々しく背負えるものでもないとシオンには分かつていた。

「姉さん、何所に居るのかなあ・・・

「心配か?」

リドルは首を横に振る。

「うんにゃ、姉さん僕よりずっと強いから大丈夫だつて」「どう見ても心配しているという顔だつた。

全くコイツはどんなに辛かうつと悲しかうつとやつやつてへりへら笑つて平氣そうな風にする、シオンは思つた。

それだけ強い精神を持ち合わせているのだろうが、いつか壊れてしまわなかと不安になる。

(あの時みたいなのは勘弁だからな・・・)

互いに何も言わないので数分ほど経とつとしていた。

何だか急にしおらしくなつたリドルに声をかけづらくなり、何とも居づらい空氣になる。

「・・・・・・・・

何かに気付いたようにリドルの目が少し大きく開く。シオンもその目線の先を追つた、すると・・・

「「すいません、止めてください」」

同時に一人は船主に言い出した。

二人の目線の先には、道の上で倒れている子どもが居た。

「・・・・

上等そうな服を着た少年だった。背丈はリドルと殆ど同じだったが、表情は幼い。

「何か勢いで船に乗せちゃつたけど・・・君、名前は?」

リドルが少年に聞いた。すると少年は

「・・・・姉さま」

見当はずれの解答をした。

「いや、僕は君の名前を・・・」

「姉さま・・・何所に居るの・・・姉さま・・・」

うわ言のように何度も少年はそう言った。

「あ〜・・・だから、あの〜〜〜・・・・

「・・・・・・・頭でも、打つたか」

リドルがあたふたしているのを少し面白そうに見ながら、シオンがボソッとひとりごちる。

「じゃ、じゃあれ……“姉さま”的前せへ。」

「……姉さまは、姉さまだよ？」

リドルはガクツと肩を落とした。

結局その少年も船に乗せたまま街を回るにした（追加料金はリドルが負担）。もしその“姉さま”がこの少年を探しているのならば、この方が目に付きやすい。

「何もそこまでしなくてもいいの」「……お前が自腹切つてしまでなんて、珍しい」

「い、いじやんか？ 別にシオンに迷惑かけてないじやん」

「まあ……」

そうだと黙りシオンは頷いた。

「それに……」

「それに？」

「INの子も自分のお姉さんを探してゐるんでしょ？ ……僕と、同じだ」

ああ、ううか……

シオンは何も言わずに、「一緒に“姉さま”を探しだした。

「やつぱり家族って……大切なもんなのかねえ……」「うーん……僕の場合は家族っていうより姉さんが……だったけど、やつぱりそうなんじやな……」

言いかけてリドルは気付いた

「「」めん……」

「なんだよいきなり。さつきから元気がないぞお前」

「・・・姉さま」

複数の意味で“謎”的少年は、さつきからそればかりだ。

「人を探す魔法は無いものかね……」

シオンがぼやく

「あるにはあるけど……探す相手が誰だか分からぬから使えないよ」

そういうたあとリドルも

「せめて名前だけでも話してくれればその“姉さま”を探せるのにあ……」

ぼやく

「・・・ディナ」

セシルたのせりあまで「姉さま」の一派張りだつた少年だつた

「え、今なんて・・・」

リドルが聞きなおす

「・・・『ティナ』

聞き間違いではなかつた

「それがその・・・“姉さま”の名前?」

リドルが聞くと、セシルは首をノクノクと上下に振つた。

「・・・じゃあ、君の名前は?」

「セシル」

「・・・なんで急に話してくれる気になつたの?」

「話したら姉さまに会えるんじよ?」

なるほどどうやらこのセシルといつ少年は自分にとつて利がない場合は一切口を開かなければ

「姉さま元に歸るの?」

セシルはじーっとリドルを見つめる

「あ、えーと・・・その・・・」

じーっとリドルを見つめる

「も、もうすぐ見つかるよ・・・たぶん」

じーーーーーと見つめる

リドルは冷や汗をかいていた

(・・・こりゃ見つからなかつたら大変だ、うん)

自分の姉より先に、他人の姉を探す羽目になるリドルであった

「・・・姉さま」

4・3 「我が姉何処」（後書き）

リドル「謎が謎を呼び、憎しみがまた新たなる憎しみを・・・！」
シオン「何言つてゐんだ、お前」

4・4 「労働祭、影の都」（前書き）

誤字脱字などありましたら・・・
優しく受け流してください（・・・）
そう、右から左へと

4・4 「労働祭、影の都」

「とにかくあなた方、この街には観光にやつてきたのかい？」

船主が尋ねる

「いいえ、僕たちは定期船に乗るために」

シオンがそう答えると、船主はそうかそうかと頷きながら
「じゃあ、この街で今田行われる祭りにつこては？」
シオンたちは首を横に振った

「そうかそうか、なら教えてあげよ。この街では毎年“労働祭”
といつものが行われるんだよ」

「何だかイヤーな名前・・・祭りなのに働くなくちゃいけないの？
リドルは労働という単語が嫌いらしい。何とも将来が不安になる発
言である

船主はぶつと吹き出したあと、大きな声で笑つた

「あつはつは、逆だよ逆。名前で勘違いするかもしれないが、まあ・
・要するに普段汗水流して働いている者たちに対する労いの意味
もあるんだ」

「むう・・・具体的にどんな内容なの？」

「主催しているお役所や貴族の人間が我々に食事なんかを振舞うい
たつて簡素なものだつたんだがね、最初は。でもそのうち街の名物
になるまでになつて観光客も増えた。ありがたいことだよ、他の国
には無いだろうな、うん」

船主は誇らしげにそう言った。

その様子をシオンはじつと見ていた

(濁つてる・・・)

リドルも何だかつまらなそづとしていた

「姉さま・・・」

船主の話にも全く興味を持たないセシルを見て、船主は
「きつとこの子も観光で来たんだろ。祭りはあと何時間かで始まるからそれまでに見つからなかつたら会場に行けばいいさ」

気が付けばもうすぐ陽が落ちる時間である。

まだ宿をとつていなことに気付いたリドルが焦りだす

「このままじゃふかふかベッドがつ！」

シオンはそれはそれで構わないという感じだった。野宿すれば宿代が浮くからまあいいかという感じだった

「まあ、野宿でも俺は・・・」

「馬鹿つ、シオン馬鹿つ、そんなんじゃ旅の疲れは取れないよ、馬鹿馬鹿馬鹿つ」

休むことには全力で取り組むリドルはシオンの肩を掴んでブンブンと揺させた。

「それなら私が宿を紹介しよう、安いし食事が美味しいところだよ安上がりで済ますことに全力で取り組むシオンは、リドルの腕をパツと掴み
「じゃあそこの」
とだけ言つた。

「ならすぐに行こう、私はその宿の店主とは知り合いだから顔が利く。もし満室でも予備の部屋があるからそこに泊めてくれるだろ。」「え、でも・・・まだ早くない？」

「遅いくらいだよ、今日はお祭りだからすぐに満室になっちゃう。」

さあ行くよ

まだ回つていないとこりがあるが、船主はすぐにでも宿にシオンたちを連れて行こうとした。

妙に焦つているとか、急かしているとか、どこか変な感じだった。

「姉さま」

セシルが建物と建物の間の細道の方を見て呟いた。

「・・・セシル、姉さまは悪いけどお祭りのとき」

「ちょっと待て、リドル」

シオンが何かに気付く。一人はセシルの視線の先に誰かが居る事に気付いた。

「探したわよセシル・・・心配したわよ、もつ・・・」

その方向には、フリルのドレスを纏つた金髪の少女が立っていた。まるで人形のような整つた、無機質な笑顔の少女がこちらを見ていた。

「えーと、この子のお姉さんですか？」
リドルが一応確認のために聞いてみる。

だが「人はこんな人気の無い所で、弟を探すためとはいえたの子が一人で歩き回るのは不自然だと感じた。

何よりこの静かな場所で今まで少女の足音が全く聞こえなかつたのも妙だつた。

「ティナといいます。弟のセシルがご迷惑をおかけして申し訳ございません。ありがとうございます」

優しく笑つてディナという少女は一礼をした。

「あ、いやいや別に一緒に船乗つて回つてただけだし気にしないで下さい」

リドルがほぼ同年代の少女に対して軽い感じで会話をする中、リドルとシオンは一人を警戒していた。

特にセシルの方に

「姉さま、僕もう我慢できないよ」

今まで賊やら何やらと何度も命のやり取りをしてきた一人だが、その中で分かったことがいくつかある
魔力を操り、魔具や魔法、魔術を駆使して闘うシオンたちにとって、普通の人間が相手ならば田を瞑つっていても無傷で、相手を倒すことは可能である

「そう・・・我慢してたのね、偉いわセシル」「えへへー」

ただ、魔法使いも魔力を使わなければ普通の人間と殆ど変わらない。だから普通の人間と思って油断していたら急に魔法を使つてきて思わず痛手を被ることがある

区別することは容易ではない。だが、今までの闘いの中で二人は僅かな違いを感じ取る

「弟さんが見つかって良かつたな、ところで今晚の宿は？」
全く気付いていない船主がディナに話しかける

「まだなら私の知り合いがやっている宿を紹介しよう、さあ君も船

に乗りなさい」「

セシルはじーっと船主を見つめる。

しかし船主はディナの方を向いていてそれに気が付かない

「ディナはくすつと笑つて

「その宿屋はさぞ素晴らしいものなのでしじうね」

声が聞こえてきた。恐ろしく冷たくて妖しげな声だった。

僅かに周囲の空気が冷たくなるのを感じる

船主が一瞬驚いたようにしていたが、笑いながら答える

「ああ・・・とても素晴らしいよ、保証しよう」

船主はいまだに気付いていなかった

ディナの眼に浮かぶ負の感情

殺意

「リドル」「大丈夫」
シオンとリドルはそのやり取りだけで互いの意思を伝えた。

「んー・・・」

セシルは相変わらず無表情のまま船主を見ている

「どうした、乗らないのか。船が苦手なのかい、なら場所を教えるから・・・」

「いいえ、場所は知ってるわ。一度一度行つたことがあるから・・・奴隸として」

船主の表情が一瞬崩れる

「な、何のことかな」

「言葉の通りよ・・・一度私たちはあそこで売り飛ばされたのよ。

奴隸商人さん

「奴隸・・・?」

リドルが訝しげに船主を見る。船主の顔からは汗が滲み出でていた（奴隸か、なるほど・・・）

「何を言つてるんだ、あまりでたらめなことを言つてると・・・」

急に周囲の空気がサーっと音を立てながら白くなつていった

「な、何だこの霧はつ?」

船主だけが慌てふためいていた

船主はこの白い空気を霧と言つたが、実際には違つていた。

「ふふふ、そこのお一方」

姿は見えなくなつたが、ディナがシオンたちに声をかけてきた
「良かつたわね、その男についていつたら身包み剥がされてどこかの貴族に奴隸として売り飛ばされていたわよ」

水面が凍りつくほど空気が冷たくなつていた。

白い空気はパリパリと音を立てている

「何だこれ・・・や、寒い・・・」

船主一人だけが寒さに凍える。恐らくは何らかの魔法によるものだ

ひつ。使つてゐるのはおそらくトライナ

「二の街の忌まわしき過去つて奴か・・・
シオンが何か知つてゐる風に言つた

「あら、知つてゐるの?」

相変わらず姿の見えない少女は少し残念そうに言つ。

「いや、この人の話がどうにも腑に落ちなくて」

「それは僕も思った」

リドルが口を挟む。シオンはディナの方を見た

「どうぞ」

そう言られてシオンは話し出す

「労働祭つても結局のところ過去に奴隸だった人間たちにしてきたことに対する償いのつもりなんだろうなって思つていたよ。償われるべき人間はどうせ殆ど死んだんだろうがな」

「いい読みよ、でも少し違う」

船主が一人だけ凍えそうな表情をしている中、シオンとリドル、そしてセシルと（姿は見えないが恐らく）ディナは平氣そうだった

「は・・・は、は・・・寒い・・・はひ・・・」

既に船主の身体は蒼白くなつてゐるが、誰一人として気にかけることは無かつた

セシルは全くその場から動かず、固まつたよつにしている

「そつか、自信あつたんだけどな

「は・・・はふ、かはつ・・・」

船主の身体の表面に霜が降りてきて、顔や手の皮はひび割れて血が

滲んできた

「ひ・・・ひぬ、はふけへくへ・・・・」

船主が何と言つたかは分かつたが、誰も船主を助けなかつた

ぶしゅつ

身体のところどころから血が吹き出しだが、一瞬でそれも凍りついた。

まるで真つ赤な無数の針が身体中に刺さつているかのような状態で、船主が呻き声を上げる

「だの・む・・助けでつ・・ぐれつ・・・かはつ」

必死で助けを求める船主。

「ああ、もう喋らなくていいわ貴方・・・口を閉じなさい」

「ぞんな、死ん・・じまつ」

「セシル」

「うんつ！」

ズシャツ

どこから出したのかセシルは真っ黒い刀身の両刃剣を抜いて船主の胴体を切断した。

血が噴き出すより凍りつくのが速かつたので、飛び散るよつなことは無かつた。

上半身が凍つた水路の表面にじろりんと転がり落ちる

「さて、良かつたら正解を教えてあげましょつか？」

「せうだな、できれば死ぬ前にお願ひしたいね」

4-4 「労働祭、影の都」（後書き）

物心付いた頃から私は孤児だった。

母親の愛情を知らず、父親の背中の大きさを知らず
私は今まで生きてきた

ある日私は養子として貴族の家に引き取られた

その貴族の家で、私は酷い扱いを受けていた
両親から、兄や姉たちから

「申し訳ありません」

「ごめんなさい」と言つと「馴れ馴れしい」と言われて、思い切り叩か
れるので私はいつもそうやって謝つていた

本邸から離れた薄汚い小屋に住まわされ、食事も残飯だけ、服もぼ
ろ布のようなものしか『えられず・・・

本当に奴隸のような扱いを受けていた

初めてこの人たちと会った時は優しくしてくれて、血は繋がつてな
いけれど本当の家族のようになれる気がした。

でもこの扱いは何だというのだろう、私は毎晩冷たい床の上で声を
殺しながら泣いていた

それでも私はこの家から逃げ出そうとはしなかった。
どんな扱いを受けようと、虐げられようと、初めて会ったときのあ

の貴族たちの笑顔、そして病氣や怪我をしたときには医者を呼んで看病してくれたこと・・・

足枷が私をこの家に留まらせた。
僅かで淡い希望が捨て切れなかつた。

でも、それは悲しいくらい残酷に、あつけなく消え去つていつた。

「新しい家族だよ」

私より小さな男の子が、私と同じように身寄りの無い男の子がこの家にやつてきた

「！」人がお前のお姉さんだよ」

貴族の男が私を指差してその子に向つ

「・・・僕の・・・姉さ、ま？」

その後男が信じられないことを言つた

「ああ、もつすぐじの家を出て行くがな

その子は生まれた頃から奴隸として生きてきた。

私と違つて養子としてこの家に来たわけではない。

だから反抗的な態度は一切とらない、どんな仕打ちにも表情ひとつ
変えない

だから、この子より役に立たない私は要らなくなつた

私が病気になつたときに看病してくれたのも、「自分の家で死んだ
ら処理に金がかかる」だけのことだった。

この国では奴隸は「形式上」禁じられている。だから「形式上」は
養子として貴族の家に売られていく

思えば看病しに来てくれたのも、医者が来る日だけだった。
外に連れて行くときだけちゃんとした服を着せてくれた。

表向きは家族に見せるため、それだけのため

あのとき私はそれを僅かな愛情だと錯覚していた

でも、そこに愛は無かつた

・・・馬鹿馬鹿しくなつた

自分が、この「家族」が・・・

生きることが

大声で泣き叫びたかった、でもそれも許されない
私は「奴隸」で「人間」じゃない

奴隸はただ人形のように感情を押し殺して、機械のように働かなければならぬ
それができたのも僅かな愛を感じていたから
ささやかな希望を抱いていたから

だから今まで、どんな仕打ちにも耐えてきた

でも私は気付いた

ああ、きっと私はこの世界では要らない子なんだな

自分の信じていたものがガラス細工みたいに簡単に壊されて、崩れ
ていった瞬間

もう私の心は壊れてしまった

壊れた心の代わりに、何かが私の中で目覚めた

気が付いたら「家族」だと思っていた人間たちが全員氷づけになつ
ていた。

恐る恐る触れてみたら、簡単に粉々に砕け散つた

それ今までの私と同じように、あっけなく

なんだ、人間なんてこんなものなのね
とても弱くて、そのくせ愚かで、矮小で・・・可哀想な生き物

少し自嘲気味に笑つていたら、一人だけ動いている者がいた

「・・・姉・・・やま？」

この子だけは凍らないでその場にいた
驚いているのかどうかも分からなかつた、全く表情が変わらなかつたから

「貴方は私なんかよりもっと早く壊れてしまったのね・・・」

「姉さま・・・寒い」

そつとその子を抱き寄せる

「大丈夫・・・私が暖めてあげる、私たちは家族だもの
「家族・・・？」

私は頷いてぎゅっとその子を抱きしめる

「そう、私は貴方の世界でたつた一人の・・・家族なの
「じゃあ・・・僕は姉さまのたつた一人の家族なの？」

「ええ、そうよ・・・私たちは家族・・・だから」

ずっと一緒に

いつまでも、どんな時も

「・・・・・家族」

その子が少し笑つたように見えた
その時私の中で憎しみや悲しみ、負の感情以外の別の何かが生まれ
ていた

「私が貴方を守つてあげる、だから・・・貴方は強くなつて私を守
つて」

愛情、それとはまた違つ・・・でもとてもよく似ている何か

私たちだけのこの世界、一人だけのこの世界
それしかいらない、それ以外はいらない

みんなみんな・・・邪魔だから壊してしまおつ

私たちの存在をこの世界に知らしめてやるつ

もう今更私たちは・・・
「人」には戻れない・・・

でも悲しくは無い、だってこの子がいるから

「ねえ、貴方・・・お名前は?」

4・6 「凍てつゝ風、凍てついた心」

辺りは一面凍りついていて、不気味なぐらいの静寂を更に強調させていた

凍りついた空間の中心に一人佇む少女は薄笑いを浮かべている

「ふふふ・・・この街では昔ね、奴隸制度というものががあったのよ。表向きは養子という形で孤児たちが貴族の家に引き取られていったわ」

ディナは妖しげな眼でシオンとリドルを見つめる

「・・・奴隸として」

（あの眼・・・良くないな）

眼の色だ、魔力を繰って闘うものの中でシオンたちに敵意を示し、脅威となりうる連中は大抵眼の色が普通の人間と違っていた

（曇りきつたあの眼・・・濁りきつたあの眼、飢えた肉食獣のような眼だ）

そういうった眼をした連中は誰彼構わず殺して、壊して、喰らいつくし、そして最後にはまわりを巻き込めるだけ巻き込んで自分も死ぬ（あの眼になるには相当酷い過去、いじめ、暴力、虐待、差別・・・

この年で全く酷な・・・

眼を見ただけでどれだけ辛い過去を送つてきたか、ある程度感じ取
ることができる

ディナもそうだが、酷いのはセシルだった。

ディナが来てからのセシルの目は瞳孔が完全に開ききついて殆ど
真っ黒だった

どんなに強い心を持つてしても、未だ幼いあの少年にどれほど地
獄があつたというのか
想像したくも無い

（負の感情が心を強くし、魔法を生み出す。でもあの子はそれに耐
えられないで完全に壊れてしまった・・・）

世界の闇が生み出した、悲しい存在
それがあの一人なのかもしない

「私もセシルもある貴族の家に奴隸として引き取られたの。もうそ
の家は無くなってしまったけれど」

シオンたちは大体の状況を察した

かつてこの国では影で奴隸の売買が行われていた。
表向きは孤児として、代金は孤児院への寄付金として

そうやつてこの一人のような子どもが大勢鉄錆臭い血と欲望が渦巻
く人の闇の中に放り込まれていったのだろう

恐らく少し前に戦争でもあったのだろう。だから孤児が多くなる
戦争で国が揺らぐ、人の心が揺らぐ

その揺らぎが、人の歪んだ心が、いつした悲劇を生み出す

そして奴隸制度が明るみにじたとき、民衆から猛反発が起きる
民衆を強引に押さえつけるほどの力も、もう無くなってしまったの
だろう

貴族や王族の人間はまず謝罪を行う

「奴隸」ではなく「民衆」に

そして奴隸制度が撤廃され、奴隸だった人間も普通の人間として生きていふことを許された

それに伴い「労働祭」という形で貴族たちから民衆への劳いが行われた
反省の意を強調したいがために始まつた、これ見よがしにと言わんばかりの行事である

つい先日まで散々悪行の限りを尽くしてきた者たちが手のひらを返したように

「奴隸制度などといつものあつてはいけないものだ」

などと抜かすのである。

だが、実際に人として生きていけた「元奴隸」は皆無である

民衆がはん反発したのは

自分たちまで被害に遭いたくないから
貴族の連中だけいい思いをしてずるいと思つた

本心は結局それだけなのである

奴隸になるのは皆身寄りの無い者たちだ
だから助けてくれる人間なんて誰も居ない

誰も奴隸を人間だなんて思つていい
それ以下の存在としか見ていない

だから助けようなんて思わない、奴隸を助けるなんて
死にかけた蛾を助けるのと等しい、それぐらいにしか思つていなか
つた

仮に助けたとしても、それは自分自身の優しさを他に示したいだけで、自分を美化する行為に近しい

人間は、人間以外の生き物にはどこまでも残酷になることができる
人間は、善意を押し付けて自分をよく見せることができる

かつて奴隸だつた彼女はそう悟つた

「だからね、私たちも人間・・・特に大人に残酷になることにしたの。見つけたら全て壊してしまうことにしてるわ。でも子どもは壊さないでおくの。親のいないという孤独から少しづつ壊れしていくのを見て愉しむのよ」

「人間はそんなに醜いか?」

シオンはディナに聞いた

ディナは少し不満そうにシオンの方を見て

「ええ、とても」

とだけ言った

「人が全て悪だなんて思っちゃ駄目だよ、きっと・・・」
リドルが言おうとしたが、ディナが強い口調でそれを遮る

「私たちが見てきた人間は全員悪だつたわ!私たちにとつてはそれが人間の全てなの、そうやって下らない言葉で繕わないで!」

「・・・下らなくなんか、無いよ。だって僕は今までいろんな人に出会ってきた。いい人にも、悪い人にも」

自分の行いを悔いて、国を去っていった者
その者を慕い、影から見守り続ける者たち

自分の無力を呪い、死に場所を求めて仇討ちをする者
人知を超えた領域で一人の人間を愛した者

旅の途中であつた者

「君たちが出会つた人たちが全て悪なら、それが君たちにとつての
人間の全てなのかもしれない。でも僕たちにとつては違う
リドルが真剣な表情でディナに訴える

「そう、それは良かつたわね。でも私たちは私たちのしたいようこそ
するわ」
「させない」

リドルを中心にしてフツと風が巻き起^ひる
それを合図にシオンは剣を抜く
セシルは殺人衝動に駆られ、目をキラキラと輝かせる

「貴方たち、お名前は?」
「リドル」
「シオン」

「なら、止めて御覧なさいな。リドル、シオン」

周囲を包み込んでいた白い霧が晴れて、冷氣も収まる

「私たちを殺しても、止めて見せなさい」

私たちはもう、自分では止められ所まで来てしまった
でも後悔はしていない

私とセシルと

二人がいれば何も要らない

他に価値あるものなど、この世界には在りはしないのだから

4・7 「沈黙の暗黒街」

「な、何だあれ・・・」

「水路が凍つてゐる・・・」

「誰かいるわよ、船の上・・・っ」

白い霧が晴れたら周りに人だかりができていることに気が付いた

「人がこんなに大勢・・・いつの間にっ？」

誰かが近づくような音は聞こえなかつた。

霧が晴れた途端に大勢の人、多くの話し声、足音、物音、ざわめき、

雑音

これだけの、耳障りなまでの大きな音に今まで気付かないわけが無
かつた

普通ならば

「君の魔法だね」

リドルはディナの魔法によるものだとすぐに気付いた

「やっぱリアイツも魔法使いか」

シオンが確認するように言つと、リドルが頷く

「ふふ・・・賢いのね」

サイレント ダーク
沈黙の暗黒街

自分を中心とした一定の範囲の空間内の音を消し去る魔法

ただし術者は任意に無音化しない音を選べる

(今回の場合は霧の内外の音の行き来のみを対象に使用した)

この霧はディナの別の能力によるもので、「サイレントダーク」とは関係ない

ディナは周囲で騒いでいる人間たちを吟味するように見回した
その中で子どもを連れていた男女が水路の上の架け橋の上にいるの
を見つけた。恐らく家族で祭りに来たのだろう

子どもはまだ5・6歳程度の幼い男の子だった
その子どもと目が合つた瞬間にディナはニッコリと笑った

「セシル」

ディナが言つた瞬間セシルが船の上から跳んだ。向かう方向はその
親子の下

「あははっ」

親子はまだセシルがこちらに向かつて跳んだことにすら気が付いてい
なかつた

セシルは父親の田の前まで来たら思いつきり持つていてる剣で思いつ
きり横に薙いだ

「・・・？」

手応えが無い・・・

見てみるとそこには腰を抜かして驚く父親と、それに寄りすがつて泣きじゃくる子どもと母親

田の前に立たせつゝまで自分の近くに居た銀髪のアホ毛の少年

「させない」

リドルは自分の鞄から取り出した分厚い本でセシルの剣を受け止めていた

「何だよあれえっ！」

「ひいっつーー！」

よつやく状況を理解した周囲の人間たちが慌てふためいてその場から逃げよつと走り出す

「うふふ、いい眺め」

逃げ惑う民衆を見てディナが微笑む

「・・・・・」

シオンはディナが何か企んだよつな顔をしているのを見て、警戒していた

自分まで戦闘に参加したらこの少女は何をするか分からぬ
それにある少年は見る限り戦闘タイプ、特殊な魔法を使うわけではない

今のところは基本的な身体強化の魔法しか使っていない様子だった

警戒すべきはこの少女の魔法

今まで使ったのは音に関する魔法と冷氣の魔法

どちらも範囲が広いが、一つ一つはそれほど厄介ではない
一つ同時に使わることこそが厄介なことだった

音が無いから目で見ないと分からず
常にあの動きに注意していないと、何をされるか分からず

氣付かないうちに周りの人間が全員殺されていた、といふことも有り得る

恐らく既にその能力で・・・

「邪魔あ・・・っ」

セシルはもう片方の手でまた剣をどこからか出してがら空きになつてる反対側の横つ腹に向かつて剣を振つた

キン

また手応えが無かつた

今度は剣で受け止められていた

セシルと同じで先ほどまではどこにも見なかつた本が突如リドルの手に現れていた

「何でえ・・・?」

セシルは何故リドルの持つてゐる本には傷一つ付いていないのか、どこからリドルは剣を取り出したのかが不思議で仕方が無い様子だつた

更にはリドルの持つてゐる剣は、セシルのそれと比べるとかなり細身の剣だった

レイピアのような突きを主体として戦うための剣の腹の部分でセシルの大剣が受け止められるということは物理的には考えがたい

「ああ、何でだらうね」

言つた直後リドルは魔法で突風を巻き起こしセシルを船の方へ吹き飛ばす

「うわっ」

体制を崩し風に飛ばされてゐるセシルを、それより速い速度で飛んで追う

セシルに追いつくとリドルは突きを繰り出す

狙いは足

リドルはまだ命を取るつもりは無かつた

足を狙つて動きを止めるという考へで動いていた

「わあー・・・」

ガキン

リドルの突きは突如目の前に現れた氷塊によつて途中で止められた

「・・・」

剣を引き抜いてリドルはティナの方を見る

「安心してね、まだここにいる人間は誰も殺していないわ」
視線に気付いたティナは微笑みかける

「・・・！」

リドルは田の前に弱めの突風を起こして自分を横に飛ばした
その直後に自分がいた場所に氷塊が現れる

「あら、残念」

アブソリュート・ゼロ

ティナのもう一つの魔法

自在に氷を出現させる魔法

先ほどの白い霧も、微細な氷が無数に空中を飛び回つて作り出した
ものである

「うーん・・・」

ティナはわざとらしく考え込むような素振りを見せた後一言

「逃げまじょうか、セシル」

「うん、姉さま」

セシルは言われるとすぐにティナの元に飛んでいった

「・・・リドル！！」

マズイ、逃げられたらあの姉弟を見失う

「分かつてゐけどっ・・・！」

近づこうとするとディナの氷が邪魔をする
仮に追いついたとしても、セシルとともにやりあうことになる
正直近戦では分が悪い

シオンならセシルには勝てるが、ディナの氷がそつはさせてくれない
標的をまだ逃げてない街の人間に向けられたら、リドルの反射速度
では対応しきれない

周りの人間を庇いながら戦うといつのは相当にやりづらいうものだった

「ふふふ、では御機嫌よう」

一人は細い通路に逃げ込む
先ほどより更に濃い白い霧が辺りを包みだして、ディナとセシルの
姿を隠す

「く・・・つ」

ここで逃がしてしまつては取り返しが付かない
リドルが強風を巻き起こして霧を吹き飛ばし、シオンがそこに突つ

込む

だが既に姉弟は居なくなつていた

「くそ・・・・・」

悔しさからシオンが壁を叩く

「・・・・・・・」

リドルがその場に力無く立ち尽くす

これではいつどこで「何をされても」音がしないので気付くことが
できない

物音も、悲鳴も全て「ディナのあの魔法で書き消されてしまう
入り組んでいてその上広いこの街でたった一人の人間を田だけで、
すぐに見つけ出すのは不可能に等しい

更に悪いことに、シオンたちは知らなかつたが「ディナの「サイレン
トダーク」では「ディナとセシルだけは普通に音が聞こえるようにす
ることも可能だった

この魔法は相手の虚を突く」とに關しては最高に優れた魔法である

一 越田を離せばナリでねしまことだつた

・・・普通なりが

4・8 「血染めの宴」

「ふふふ、どうしましょうかセシル」

人気の無い裏通りを走りながらティナが問いかける
「壊そう姉さま、いっぱい、いっぱい」

壊すんだ、何もかも

音も無く一人はただ走つていく

その歪んだ欲望を満たすための獲物を探すために

「ふふ、近いわ・・・」

出鱈目に入り組んだ通路を走つて見えたが、二人の研ぎ澄まされた感覚は確実に獲物の臭いをたどっていた

少しづつ距離を詰めていく。相手はティナたちに気付いていないようだ

「5人くらい居るわ・・・良かつたわね、セシル」

「うん！」

6人の若い男女だった。派手でだらしない格好で大手を振つて歩い

ている

の方が何か話すと、男の方が大きさな反応をする

「ディナたちは後ろで彼らの様子を見ていてほくそ笑んだ
「浅ましいわね、がつつきすぎですわよ？」

その声を聞いた男たちが足を止めて、後ろを振り向いた

「・・・ああ？」

三人の男はそれぞれ凄んでみせてディナを睨みつける

「子どもかよ・・・」

「餓鬼は早くママんとこに帰りな」

自分たちより身体の小さいセシルとディナを見て、男たちは確実に油断している

戦つたことの無いこの若者たちは、外見の強さでしか相手を測ることができなかつた

「まるで自分たちが大人でいるつもりの言い草ね、セシル」

「そうだね姉さま。こいつら僕たちより弱いのに強い氣でいるよ」

一人は示し合わせたように笑い出す

「・・・・・」

男たちが一步前に踏み出すのを見て女たちが

「ちょっとやめなよお」

「止めておきなさい、見栄のために命を捨てるなんて無意味よ」

「は？」

「駄目だこいつ・・・本の読みすぎだぜ、あいつ」

「正義の味方気取りかあ、ぎやははは」

男たちは笑っていたが、少し脂汗のよつたものをかいいていた
どんなに鈍感な者でも、ティナとセシルがずっと殺意を向け続けて
いればすぐに気付くだろう
だが男たちはこの正体不明の不安が目の前の一人の子どもからの殺
意だということに気付いていない

「下卑た笑い声、それで誤魔化しているつもり?」

「おい・・・あんまり調子に乗ると・・・」

わざとらしく男のうちの一人が拳を振り上げる

だが一人は笑ったままで全く動じない

「姉さま、こいつきつとカノジョの前だからカッコつけよつとして
るんだよ」

「そうねセシル。弱い生き物は見せかけの強さに頼る」としかでき
ないものね」

二人の安い挑発に男たちはあつさりと乗せられた

「てめ、こいやろ・・・！」

男が思いつきり拳を繰り出す

ザシユツ

「あははっ」

セシルが満面の笑みでその腕を切り捨てる

本体から離れた腕が赤い飛沫を撒き散らしながら宙を舞う
その間にセシルは続けざまにもう片方の腕を斬った
まだ男は斬られたことに気付いていない

そして右足、左足

最初に腕を斬つてからこれまでの動作は一秒に満たない僅かな時間
で行われた

「・・・え？」

視界が急に下に落ちていく」と男はようやく自分の異変に気付いた

「ひ・・・・・・・」

後ろに居た女たちが

悲鳴を上げる

「あ、あがが、はぐつ・・・」

四肢を一瞬にして失った男はもがく事もできずに地面にうつ伏せになり、苦悶の表情を浮べている

「ふふふ、弱いつて愚かね。貴方が本当に強ければこつなる」とぐらい分かつたはずなのに」

「」

男はビクッと怯える

今なら分かる、この二人はヤバイ

たた強が二で偉ふ二でいた自分とは違ふ

声が、目つきが、動作の全てが恐ろしい
自分の常識の範囲を遥かに超えた、この二人

死に直面した今となつて自分のか弱さを思い知らされる

「三一堂」之「三一堂」

「ひ・・・やめ、止めてくれ・・・」

後ろの五人に助けを求めるようとしたが、既に五人はそこに居なかつた

• • • • • !

逃げたわよ、あの人たち

「そ、そんな・・・」

「当然でしょう、虎に捕まつた一匹の鹿を助けに来るなんて・・・。
ねえ？」

「裏切りやがつた・・・！」

その言葉を聞いて、ティナは大きな声で笑い出した

「あはははは、貴方・・・少し、足らないんじゃなくて？私たちか
ら見れば貴方たちなんて所詮一人では何もできない弱者。だから群
れている、けどお馬鹿な貴方たちはそれで自分たちが強くなつたと
勘違いするの」

ティナは思いつきり男の顔を踏みつけた

「はぐうっ」

「一人になつた途端に随分と弱気になつたじゃないの、ねえセシル
？」

「うん、姉さま。・・・いい？」

「ええ、どうぞ」

セシルが思いつきり剣を振り上げる

「わーい」
「待つてくれ、まだ俺」

振り下ろす

「ふふふ、おばあ～かさん

五人の男女は必死で逃げていた
残された男のことなど全く気になどしていない
優先すべきは自分が生き残ること

「あつ」

女が一人躊躇って転んだ。誰も助けない

「ちょっと・・・ちょっとお！！」

声は四人には届かない。急いで立ち上がりうつとする
(やばいやばいやばいって・・・追いつかれたらあたし・・・！)
急いで走り出そうとする、その女の肩をやさしく触る者が居た

女の表情が凍りつく

「可哀想、見捨てられちゃったのね」

ゆっくりと振り返る、恐怖で両脚がガクガクと震える

「ふふふ」

振り返った瞬間見えたのは、満面の笑みを浮べるティナと、自分の横を猛スピードで通り過ぎていくセシルの姿

次の瞬間には女は凍りつき、その次の瞬間には粉々になっていた同時にセシルの向かつた先で男女の断末魔の叫びが聞こえた

「ああああああああああああああああ！」

必死で逃げる3人。一人目の男は数秒前にセシルに細切れにされてしまつた

残つた二人の女のうち、後ろを走つていたほうの女が前を走る女の髪を掴んでグイと引き寄せた

「あつ・・・・！」

バランスを崩して女が倒れる。それを無視して髪を引っ張つたほうの女は走り去る

「何すんのよ！？！」

立ち上がりながら女が叫ぶ

「五月蠅い、あんたはそこで殺されてな！？」

酷い言い様だつた、つい数分前には仲がよさそうに談笑していた者たちがこの様だ

「てつめえええええええ！」ぶつこぐ

言い終わる前に女は凍りづけになつた
「駄目よ、レディーがそんな言葉遣い」
言いながらティナは凍り付けの女を指でピンと弾く。ガラガラと砕
け散り、女が助かる可能性は〇になる

「何なんだよ！…あいつら…！」

「知らないわよ！…」

残された二人の脚も限界が近づく、息も絶え絶えといった感じだ

「！」・・・「」れだけ走つてりや・・・

男が後ろを振り返り、あの姉弟がもう追つてきていないかどうか確
認しようとする

「振り切つ」

振り返ると目の前には飛び上がって剣を振りぬくセシルの姿が

「た」

その姿を確認したときには男の顔の、鼻の頭の辺りから上が吹き飛
んでいた

それを見た最後の女は発狂したように走り出す

「あああああああああああああああ…！」

突如目の前に氷の壁が現れ、女の行く手を遮る

「ふふふ、追いかけてこはおしまい」

「楽しかった」

「。。。へまく、させ」

セシルがゆつべつと一歩ずつ女に近づく

止めて止めて止めて止めてばあたしが何したって

ブショットと嫌な音がした後に、氷の壁が真っ赤に染まつた

「何もしなくてもね、人は人を殺せるのよ」「姉さま、僕もつと壊したいよ」
「ええ、そうね・・・まだまだ足りないわ」

セシルとディナは再び次の獲物を求めて走り出した

4・9 「風の如く、駆け抜ける想い」

シオンたちは街中を駆け回って姉弟を探し回っていた
「ここも・・・」

氷付けになつた人、切断された人
辺りは血で真つ赤に染まっていた
あまりの光景、鼻がつぶれてしまいそうなほど悪臭にシオンは顔
をしかめる

「早く見つけないと・・・」

シオンがそう促すが、リドルは動かない
「・・・リドル？」

声をかけても、黙つて俯いたままである

数秒遅れて

「シオン」

リドルが顔を上げて返事をする

「僕、言つたよね。次はちゃんと戦うつて」

そう言つたりドルの表情は何か腹をくくつたようで、それでいて・・・

「止められると思ってた、まだ救えると思ってた・・・
どこか儂げで、悲しげで

「でも・・・駄目かもしれない」

今にも崩れてしまいそうな、そんな気がした

「・・・もう、これ以上巻き込むわけにはいかない。だから・・・
！」

シオンはリドルの覚悟を受け取って、そして

「ああ・・・分かったよ
とだけ、返事をした

「ああ、愉しい。人を壊すって本当に愉しいわ

「姉さま、そいつまだ生きてるよ」

セシルが地面に倒れているたくさんの死体の中に、まだ息がある者を見つけた

「あらあら・・・それは大変」

見つかったことに怯えるその死にかけの獲物は涙でぐしゃぐしゃになつた顔で、命乞いを始める。それを眺めてひとしきり愉しんだ後、セシルが脳天を叩き斬った

「鉄臭い血が私たちの搖り籠、断末魔の叫びが私たちの子守唄」

「もつと探そう、まだこのあたりに一杯隠れてるよ」

「ええ、そうねセシル。でも子どもは壊しちゃ駄目よ」

「うんっ」

そういうながら通路の脇に設置してある「ゴミ箱のふたを開ける

「ひつ」

中には中年の男が一人隠れていた

「た、助け」

「あはは、本当にゴミみたーい」

言いながらセシルは剣を突き立てる。

一度、二度・・・

その度に男はピクピクと震えながら血を噴き出す

「広場にいた人間はこれで殆ど全員かしら」

「うん、殺したー」

話している二人の背後に、一人の男が現れた

「よくも私の・・・」

気が付いたティナが振り返る

「あら、さつき見た顔ね」

「逃がしちゃった奴だよ、姉さま」

ふーんと言しながら男を見つめるティナ

「よくも私の妻をあおあお！・・・」

猛然と走りながらティナに向かってくる男。勢いよく拳を繰り出す

「触らないで下さる？」

ティナがそう言つと、男の拳がティナに触れる寸前で、凍りつき、

一瞬で碎ける

「・・・・・つ！・・！」

男は声を出してもがこつとしたが、声を出さうとしても出せない

「ふふふ、中から凍らせるのも面白いわね」「…………」

男はその場に崩れこみ、動かなくなる

「あらいけない、心臓まで凍らせちゃったわ」

ちつとも残念に思っていない様子で、ティナはクスクスと笑う

「……見つけたよ」

声がした。

ティナは驚いて声のするほうを向く。その先にはリドールヒシオンが居た

「何故分かったの……？」

「沈黙の暗黒街」が発動している限り、悲鳴などの音がこの二人に届くことは無い。なのに何故いつも早く見つけられてしまったのか

「音とはつまり空気の振動。風の魔法を扱う僕にとって空気の流れを感じ取ることは簡単なこと」

つまり、空気の流れが止まっている場所……「音が全くしないところ」を探し出したというのだ

「ありえない……そんなのいくら魔法が使えるからって、到底できる芸当じゃ……」

この広い街の全体をそいやつて探したというの？

だとしたら、また逃げてもすぐに見つかってしまう。それ以前に同じ手が通用するとも思えない。きっとまた白霧の魔法「ダイアモンドダスト金剛霧」で逃げようとしてもすぐに風で吹き飛ばされる……

「もう逃がさない。ここに君たちを仕留める」

リドルは剣を突きつける

「ふふ・・・いい眼をしているじゃない、貴方・・・」

ディナは両手をかざして、戦闘の態勢をとる。向こうにさしつけられた本
氣らしい

「貴方も私たちと同じ・・・暗い闇の中からでて来た者の眼・・・。
しかも私たちよりも大分濁つている・・・それなのに何故そうやつ
て居られるの？」

ディナの問いにリドルは答える

「そう在りたいと願つたから。また光の中で生きたいと願つたから。
願つてくれる人たちが居るから」

「そう、貴方にはそういう人たちが居るから・・・でも、私たちには居なかつた！――」

もの凄い冷気が進る。周囲の建物が一瞬にして氷付けになつてしま
つた

「何で私たちはつ――どうして私たちがつ――」

無数の氷の飛礫がリドルたち目掛けて飛んでくる

「はつ！」

シオンが剣を思いつきり振り、その剣圧で飛礫を振り払う

「何故私たちに冷たくするの？」

二人の頭上に巨大な氷柱が現れ、落下してくる

「だあああああつ――！」

シオンは飛び上がってそれを両断する

「すごいねーその剣」

目の前にはセシルが居て、既に剣を振る動作に入っていた

空中では動作が僅かに鈍つてしまつ、シオンの反応が僅かに遅れた

「ちょ――・・・」

間一髪でシオンはセシルの剣を受ける

「だいっ！」

もう片方の剣が襲い掛かる、だが

「ふわっ！」

突如セシルが真横に吹っ飛ばされる

（本来ならありえない位置から突風・・・一体？）

リドルは地上に居た。そしてセシルは地上10メートルほどとのところに居た

だがリドルの風の魔法は空中に居るセシルを、真横に吹っ飛ばした
通常の魔法は術者から放たれ、今のような位置で発動するなど在り得なかつた

「・・・な！」

ディナが気付くとリドルはもう吹き飛ばされている最中のセシルに向かつて飛んでいた

最初に見たときとは比べ物にならない速さだ。

このままでは氷の魔法で壁を作る前にセシルが攻撃を受けてしまう。
そしてディナとリドルではディナの方が距離が近かつた

選択肢はひとつ

ドス

「姉さま・・・？」

リドルが突き刺したのは、セシルではなくティナの肩だった。

剣を引き抜くリドル。

「怪我は無い・・・セシル」

「姉さま・・・血・・・」

「平気、私は大丈夫・・・」

「姉さま、僕が守る」

「・・・セシル？」

「姉さまは僕が守る!――!――!」

セシルがリドルの方に突っ込んできた

「わああああああ――!――!」

「止めなさいセシル!――!」

ディナの声も聞かずセシルは剣を振り下ろす

だが、力任せの一撃はリドルにあっさりとかわされる。一撃田も難なく避けられてしまい隙ができる

「セシル!――!」

力が抜けて動けない、集中力が落ちてしまっているから魔法もすぐには使えない

「姉さま、『ごめん』

リドルの剣がセシルの心臓を貫く瞬間
そう聞こえた気がした。

4・10 「溶けない氷、溶ける心」

笑顔だった

死の瞬間、彼は笑っていた
愛しい人を悲しませないために
せめて笑つて終わりにしよう

「あ、ああ・・・」

ディナは力無くその場に崩れこむ

リドルはセシルの胸に刺した剣を引き抜く。真っ赤な血がドクドクと噴き出してリドルの剣を真っ赤に染め上げる。

返り血が顔にかかるとも構わず、ディナの方に歩み寄る

「ごろんと地面に横たわったセシルにすがりつきながら、ディナは何度も名前を呼び続ける

もう一度と動かなくなつたことを理解したディナは、開いたままのセシルの目をそっと手で閉じて、セシルの身体を抱き寄せる

「・・・・じつじつこの子ばかりこんなに辛いに遭わなければならぬの？」

セシルの胸に顔をうずめたまま、ディナは消え入りそうな声でそう言った

「じつじつこの子ばかりにこの世界は辛く当たるの・・・？」

本当なら、強い父の背中に憧れ、母の優しさに包まれ

兄弟たちとは喧嘩をしながら、それでも仲良く、それでいて楽しくそりやつて育つしていくはずだつた

普通に友達と遊んで、普通に親の仕事を手伝つたりして、そして普通に社会にて、働いて、結婚して、子どもを産んで、家族ができる、いつかは大切な人たちに見守られながら息を引き取る

そんな普通すらこの子には許されることは無かつた
誰もこの子に優しくなどしてくれなかつた

もし、この子に優しくしてくれる誰かにもうと早く出会えていたら
違つた未来があつたのかもしれない

でも、その未来が訪れることは無かつた
それがこの子のあまりにも残酷な結末

ただ、不運だつたというだけで・・・
それだけの理由で

「もういいわ・・・これでお終いにしましよう」「ひ
ディナの足元が凍りつく。リドルたちは警戒をする

「私一人がこの世界に残されるのは・・・辛いわ
ディナとセシルを冷たい氷が包み込む

「生きて行こうとは、思わないの？」
リドルが問いかける。とても悲しそうな目で、声で

「ええ、私は貴方たちみたいに強くはないもの。一人では何もできない哀れな存在……だからこの子が居なくなつた今……」

「そう、なら止めないよ」

リドルがそう言う時にはティナたちは腰の辺りまで凍り付いていた

「それにね、私たち……幸せよ。一生懸命生きてきたもの下半身は完全に凍結して、相当な痛みをティナは感じているはずなのに彼女は笑顔を崩さない

「どんな時でも笑顔で……そつすればいつかきっと神様は微笑み返してくれる……」

肩の下まで凍つてティナはうわ言のようにしか喋らなくなつた

「リドルって……いった、かしら」

リドルは無言によつて肯定の意を示した

「貴方……兄弟は？」

「姉さんが……」

そう言つうとティナはまたにつこりと微笑んだ

「そう……なら、お姉さんを……大切に……ね？」

リドルはまた黙つて、今度は頷いた

「最後に一言だけ、言わせて……」

もう首の辺りまで凍つてきて声も出にくくなつてきていた、それでモディナは必死で口を動かしてリドルに言葉を伝えようとする

二人は完全に凍りついて、動かなくなつた
そして数秒後、氷にヒビが入る。それはどんどん大きくなつて、全
体にまで行き渡つた瞬間に、氷は砕け散つて砂のようになつて飛んでいつた

「なあ、何で言つてたんだ？」

シオンがリドルに聞く。リドルは少しほーっと遠くを見ているよう
な目をしていた

「リドル・・・？」

リドルの目からはボロボロと涙が零れ落ちてきた

泣いている・・・？

「僕・・・あの一人、を救つて・・・あげ、られたの、かな・・・。
これで、よかつ・・・良かつたの・・・かな？」

リドルは滅多に泣くことが無い。シオンと会つてからは数えるほど
しか泣いていない

まだ十代の半ばにも満たない幼い初年にしては辛抱強いところがあ
つた

そのリドルが大粒の涙を零しながら、嗚咽を漏らしながら泣きじや
くつている

それだけ自分の心に押し込んでいたものがあつたのだろう
きっとリドルはこの姉弟に自分を重ね合わせていたのかもしれない

その一人をリドル自身の手で・・・

自身の四肢を切り落とすくらいの痛みを今感じているのだろう
そんな彼に不用意な優しさや慰めは要らない

だから相棒として、本当の兄のような存在であるシオンにできる限りと

そつと肩に手を置いて

「頑張ったな」

たったそれだけ、それだけで十分だった
リドルの目からは涙が途切れるることは無かつた

まるで氷が熱で溶けていくよう

「あつがとい

4・11 「それでも僕ひは旅をゆく」

きっと彼女は止めて欲しかったのかもしれない
自分では抑えられないその歪んだ衝動を・・・

もしもこの世界に生きる人間がみな平等だと言つ者が居るのならば
僕はそいつを思いつきり殴つてやりたい
彼女たちの生き様を見せてやりたい

どの軽口がそんな残酷な台詞を平氣で吐けるのか
僕は、彼女たちの代わりに殴つてやろうと思つ

彼女たちがどんなに辛い過去を持つていても
あのような行為に走つてしまつても仕方が無いと言ふような理由
があつたとしても

それでも罪は罪
罰は受けなければならない

それは僕も同じ
多くの人を快樂のために殺したからと書いて
それは僕が彼女たちを殺していい理由にはならない

話し合いで解決なんて悠長なことを言っている場合でもなかつた

殺しても止めるしかない

弱い僕にはその選択肢を選ぶしかなかつた

彼女たちを殺した罪、そして罰

償つて、許されようなんて思わない
どう償えればいいのかも分からぬ

この消えない傷は一生僕の背中に
重く、のしかかる
その重圧に耐えて、僕は生きていく

そして僕は一つ決めた

彼女たちが必死で生きてきた証を、僕が残していってあげよう

僕は彼の遺した剣を取り、天にかざす

「一緒にいく、どこまでも、いつまでも

僕たちは旅をする

きっと悲しいことたくさんあるかも知れない

それでも、僕らは

旅をする

ヒューローク／そしてこれからも／

目が覚めると「アイツが居た

「生きてるー？」

アイツは「冗談半分、心配半分で聞いてくる。

焚き火が暖かい。どうやら薪を集めてくれていたようだ

「死ぬかも」

こつちも「冗談半分、本気半分で言つた。

わき腹を思いつきり斬られて、今は血は止まつたが出血量が少し多かった。

人間は全体の三分の一が出血すれば死ねるらしい。

しかしあの傷でよく死ななかつたなど自分でも自分の生命力の強さに驚く。

それ以前に切り口から妙な細菌が入り込んでいたら厄介なことになる。気のせいか腹が痛い・・・寒さからか。

「本当に・・・死んじゃつたかと・・・」

奴が何か言つたような気がしたが、よく聞こえなかつた

まだ頭がぼんやりとしていた。血が足りないせいでもあるのだろう

「腹が痛い・・・」

思わず声に出してしまつたら、ソイツはブツと吹き出して俺にこう言つ

「そりゃあそんだけカバツと開いたてたら痛いでしょ、冷たい風が沁みるだろうし」

ああ、確かにそうだ。自分で笑えてくる

起き上がるうとすると鈍痛が走る。顔をしかめていると奴は

「まだ寝てなよ、やつと田が覚めたばかりだし」

やつと・・・

そういえば俺はどのくらい寝ていたんだ？

随分と時間が経った様な気がするが・・・

「まだそんなに経ってないよ」

「イツはそう言つて笑いながら薪を火にくべた。その手は寒さで赤くなつて少しひび割れていた。

燃え尽きて灰になつた薪の量から考へると、結構な時間俺は寝ていたのだと思う

少なくとも2、3日程度はコイツに看病をえていたところとなる

「聞いていいか？」

俺が言うと奴は火を見ながら「ん？」とだけ言つ

「一人でも行こうとか思わなかつたのか、俺を置いてする」といつは笑つて答える

「思つたよ、一応。でもすぐに止めた、それだと意味が無いから」「何の？」

「僕が旅をする意味。・・・と一緒に旅をしないと意味が無いんだ、きっと。姉さんを見つけるだけじゃ駄目な気がするんだ。それに・・・」

何やら恥ずかしいように奴は頭をかきながら俺の方を見て言つ

「そんなことしたら、きっと姉さんにぶつた切られちゃうよ」
俺の中のコイツの姉のイメージがまた一つ凶悪になつていった

傷口には包帯が巻いてあるのに気付いた。いたしか不器用な気がしないでもないが、無いよりはマシだった

「・・・ありがとうな」

「な、何をいきなり」

よほど俺に礼をされるのがいやばゆいのかコイツは照れていようつだつた

「そんな感謝の言葉よりも僕が欲しいもの、分かつてるでしょ？」

ああ、そういう奴だったよコイツは

「分かったよ・・・。この傷が治つて、次の街に着いたら・・・」

ふかふかベッド、だろ

「あと“オンセん”つてのにも入りたい。次の街にはあるらしいん

だって・・・シオ・・・」

そこから先はまた眠つてしまつて覚えていない

どうやらまだまだ旅を続けられそうだ

あとがきタイムズ（前書き）

返事が無い、ただのあとがきのようだ

あとがきタイムズ

はい、ついでしたがひとまず本編は一区切りつきました
はじめましての方はじめまして（・・・）
そうでない方・・・

何故私の名を知つている

（・・・）どうも、白石礫（仮）です

この似非小説は、若干哲学的なことを背景にした似非ファンタジー
です

ただのファンタジー小説を期待していた方、申し訳ありません

第一話「これからできる町」

テーマは「新たな旅立ち」裏テーマは「償いのつもり」
生きしていくと絶対に100点満点の取れない問題にぶち当たります、
どうかご注意を

第一話「夢の国」

テーマは「守りたいもの」裏テーマは「正義も悪も無い」
どちらも自分の大切な人や物のために闘つていてしたら、どちら
が悪いだなんて・・・言えますか？

第二話「出会い」の中で

まあ、第一話の蛇足的なものだとお考え下さい
テーマは「出会い」裏テーマは「彼らの旅路に」
名前は世界で一番短い私小説なのだと、とある有名な方が言ってお
られました

第四話「それでも僕らは旅をする」

テーマは「一人の分も」裏テーマは「悪いのは、誰？」

殺人犯も悪いですが、殺人犯にさせてしまった周囲の人間は悪くないのでしょうか？

関わらないことや知らないことも、それは一種の罪と言えるのでは？まあ、ご近所付き合いって大事なのよ。そういうことです（笑）

Hピローグは時間軸が大分本編とずれています

といふか本編も時間軸はまちまちです

テーマは「唯一無二の相棒」裏テーマは「情ではない」

友情や愛情なんかとは比べ物にならないほどの強い絆、それが信頼です

一緒にして考えてはいけません、友達や恋人だって裏切る時は簡単
に裏切れます

今回のテーマと裏テーマはこんな感じです、はい

正しい答えは誰にも分かりません

世界はそんなに単純じゃないし、人はそんな完璧じゃないですから

さて、この後は番外編ですが期待はしないで下さい
本編が暗すぎたので少し明るいお話を

・・・要するにただのギャグ回つて奴です、ええ、はいはい

萌えもエロスもありません、あるのはただただシュールな空気だけ
です

地味にエピローグとリンクしてゐる節があります

あとがきタイムズ（後書き）

おお読者よ、まだ冒険を続けるかね？

外・1 「温泉の町」

シオンとリドルはとある宿場町に来ていた。

時刻は夕暮れ時、けれども多く的人が通りを行き交つ。

旅人、商人、馬車、町の人たち・・・

活氣溢れるとても豊かに見える町だった。

他の町などでは見かけない「着物」と呼ばれる衣服を纏った女性や馬に荷物を運ばせている男性など、一風変わった光景が一人にとつては新鮮だった。

建物も全て木造で、殆どが一階建ての低層住宅だった。「長屋」と呼ばれる集団住宅も歩く途中で何度か見かけた

「東の方にある島国の建築様式らしいよ。変わってるけど面白いよねー」

リドルがいつ手に入れたのか「黄金の国」というタイトルの本を読みながら言つ。

「その島国ではね、建物が全部黄金でできてるんだって。すごいね流石黄金の国ジパーングだよ」

何故か妙にテンションの高いリドルをとりあえず一度落ち着かせることにしたシオンは

「その本、大分昔の本だぞ」

裏表紙に発行された月日が書いてあつたので確認したあと、指摘した。
「え」
十年以上前の本だった

数分ほどリドルの足取りが重くなつた。何とも分かりやすい奴だな

とシオンは改めて感じた

「来たよ、シオン、来たんだよ僕たちは
しばらくしたら元気になつたリドルがまたはしゃぎ出す。だがシオ
ンはやれやれと言わんばかりに溜息をつく。
とりあえずリドルがはしゃぎだした場合、ザシオンにとって良い
ことは無いからだ。

（ああ、何か事件でも起きそうだな、おい）

ひどい言い様だった。だが実際そので仕方が無い。

事件を呼び寄せる力は物語の中の名探偵より優れているものがある

「“オンセん”で有名なサクツの町・・・ついに辿り着くこ
とができた」

リドルのお出でで、それは温泉と呼ばれる入浴施設だつた。
何でもこの町の宿にはその温泉があつて、それはとても大きな浴場
だとのことだつた。

更に温泉の湯は通常の水と違い、鉱物などに含まれているミネラル
などの物質が溶け込んでいて、それが身体にとてもいいらしい
自分が安らぐことに命をかけているリドルにとつて、ふかふかベッ
ドよりも魅力的な物なのだろう

「僕たちの旅の一いつの終着点でもあるこの温泉の都・・・。ああ、
長い道のりだつた・・・」

わざとらしく鼻をするような真似をしているリドルを他所に、シ
オンは町を見渡した。

木造の建造物が立ち並ぶなか、其処彼処に高く聳え立つ灰色の煙突
のようなものが見えた。

他の国の工業都市などで良く見た光景だつた。違うのは周囲を包む匂いが油や鉄錆の臭いではなく、硫黄によるものだといつくらいた

「銭湯・・・懐かしいな」

「シオン何か知つてゐるの・・・オンセン」

「・・・ん、今何か言つたか?」

「え、あ・・・いや・・・別に」

「・・・何だよ、歯切れが悪いな」

シオンは自分で言つた独り言を覚えていないようだつた。

だがそれはまた別の話。番外編ではシリアルスな話をする気は毛頭ないです、ありません

「わざわざ高い金を払つてまでこんな・・・もつたひない」

シオンがなるべく安い宿にしようとしたリドルが猛反論して、かなり高い宿に泊まることになつてしまつた。
リドルにとってどの宿に止まるかというのはかなり重要な意味を持つものだつたらしく

「いいじゃないか、お金はたつくさんあるんだし」

「手に入つたばかりでこんなに使ってたらすぐに無くなるだろ・・・つたく」

「・・・・・オンセンでは珍しい食材を使ったすゞーく美味しい料理が出るんだって」

「・・・・・珍しい、食材・・・?」

「うんうん」

「美味しい料理・・・」

「うんーうんー」

「…………よしぃ」

結局その町で一番豪華そうな宿に泊まることになった

「どこに泊まるかはお前に任せると、なるべく料理の美味しいそうな感じするところ選べよ」

「おかげおけー、任せなさいって」

リドルは魔法の腕前からも分かることだが天才肌な面があるので、それの一因かは知らないがとにかく勘がいい。推理小説の探偵並みに鋭いときがある

（普段は脳内が万年春みたいな奴だけど）「うとうときは頼りになるからなあ・・・）

「Jの町は人の出入りが多い分いい食材とかもたくさん入ってきてるんだろうなあ・・・ああ、楽しみだなあ」

予断だがシオンは料理を作るのも食べるのも大好きなのである。拘りに拘り抜いた彼の料理はそれはもう店を出したら大繁盛しそうなレベルのものである

こと食べ物に関してはシオンはよく思考を停止してしまい、本能に走る傾向がある。今回はそれを上手くリドルに利用されてしまつ何とも間抜けな一面を見せるシオンであった

「レシピも聞けたら聞いてみるか・・・ああ、楽しみだなあ」

子どものように（実際子どもだが）わくわくしながら歩き出すシオンを見たりドルは

「計画通り」

「やりと妖しげな笑みを浮べながらシオンの後について行った

泊まる」とした宿は、中に入ると一面小粒の砂利の絨毯が敷かれている綺麗な庭になつていて、枝や葉の形の整えられた植木が数本植えられていた。小さな池まであつて小さな橋が架けられていた。橋の上から池の中を見ると、水面に見たことの無い珍しい魚が集まつてきて口をパクパクさせていた

「餌よこせー・・・つてか」

シオンが何だか呆れたような表情で水面に群がる魚たちをじーっと見つめながらそうぼやいた

「綺麗な模様の魚だねー」

食べられるのかな、とリドルが呟くのが聞こえたのでとりあえずシオンは止めとけとリドルに言った

「ああ、そうか」

シオンが突然言い出したりドルは訝しげな顔で

「何が、ああそうか・・・なのさ」

魚からシオンの方へ視線を移した。シオンは魚とリドルを交互に見比べて一言

「食に関して貪欲そうな感じが誰かに似てるなーと思つてさ」

「・・・誰にさ」

「そりやあほら・・・」

シオンはその先は言わず、黙つてリドルをじーっと見ていた

「質より量・・・みたいなところとかも」

「だから誰にさ」

「いやあ、まあそりやあ・・・なあ?」

何故か疑問形だった。もう一度リドルをじーっと見る

じーっと見る

「俺は食つのは好きだけど、どちらかっていうと味の方に拘つてるからな」

いつまでも気付いてない様子のリドルに念を押してヒントを与えるシオン。顔が全く笑っていない、いつもと同じ眠そうな表情をしていた。

「・・・・・は！」

数秒ほどの時間差のあと、シオンに馬鹿にされていることにリドルは気付いた

「失礼な、僕は量にも質にも拘つてますよーだ！！」

「それはもう拘つてるというよりただの食いしん坊だ」

リドルは「食いしん坊や」の称号を得た！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6015c/>

それでも世界は回ってる

2010年10月29日13時27分発行